
機動戦士ガンダム00 The human race's reformation

K-15

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム00 The human race's reformation

【Nコード】

N2096V

【作者名】

K-15

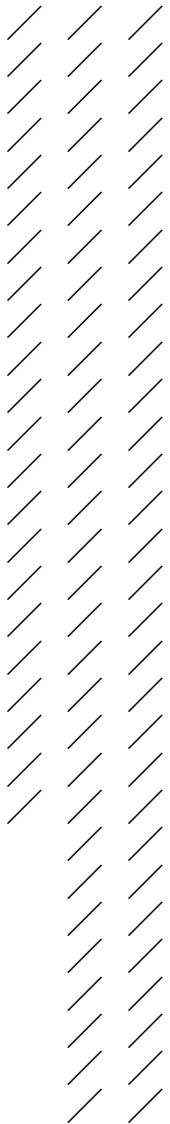
【あらすじ】

ソレスタルビーイングが武力介入をして4年が過ぎた。それでも世界は変わらなかった。数多の戦いを得てバナージ・リンクスは何を思うのか。

第一話 可能性の獣

西暦2312年

ソレスタルビーイングは再び世界の変革の為に戦い始める。



ロールアウトしたばかりのダブルオーガンダム、オーガンダムとガンダムエクシアのGNドライブを2機使用した第4世代の新たなガンダム。

しかし初めて搭載するツインドライブシステムは安定稼動には程遠かった。

イアン・ヴァステイとティエリア・アーデでツインドライブシステムのマッチング作業を進めるが考えうるすべてのプランを行ってもうまくは行かなかった。

「それでもダメか！安定領域まであと10%なんだが。」

イアンは頭を抱える。今まで試した中でこの2機のGNドライブが一番同調率が良かった。

「トランザムで強制に起動を掛ければ。」

「馬鹿言うな、そんな事をすればオーバーロードして自爆だ。」

「ならもう一度システ・・・うっ!？」

突然口を押さえ苦しそうな表情になるティエリア。

ツインドライブシステムの稼動試験をやり始めてからと言う物いつもこうなる。

何とも言えない不愉快な感覚が頭に入ってくる。

メデイカルルームで体を調べたが原因は不明だった。

コンピューターでは正常と判断されている。

「おい、大丈夫か？」

「・・・はい、心配は要りません。もう一度システムの再点検を。」

「本当に大丈夫なのか？まあいい、後は俺がやるからお前は休め。」

「了解しました。」

ダブルオーガンダムからの通信が途切れる。

イアンはもう一度一人でツインドライブシステムを稼働させるためプログラムを組む。

そのころ宇宙のアロウズの部隊がプトレマイオスを捕捉していた。新型のアヘッドでソレスタルビーングに迫ろうとしている。

ラッセは王留美からの情報でアロウズの接近して来ているのを察知する。

「アロウズにこちらの位置を知られた。」

敵は複数のMSを保有しているがこちらにはティエリアのセラヴィーガンダム1機しか戦闘出来るMSは無い。

ダブルオーガンダムのパイロットの刹那・F・セイエイもまだ戻って来ていない。

ティエリアはたった一人でアロウズの迎撃に出る。

「ティエリア・アーデ、出撃する。」

プトレマイオスのハッチが展開しカタパルトからセラヴィーガンダムが出撃する。

ティエリアを援護するためセンサー障害のあるミサイルをアヘッドの部隊に放つ。

「センサーに障害だど！？作戦変更、迂回して輸送艦を叩く。」

それでも時間稼ぎ程度にしか成らない。

長距離からのミサイルではMSを数機しか命中させることが出来ない。

ミサイルに直撃してもMSは破壊までには至らない。

「セラヴィー、目標を迎撃する。」

GNバズーカを両肩に抱えて貯蔵したGN粒子を開放する。

背部の装甲がスライドし顔のようなものが浮かび上がる。

「高濃度圧縮粒子充填、GNバズーカ圧縮粒子開放。」

ティエリアがアームレイカーのトリガーを引くと顔から緑の粒子が発生し高出力のビームが発射される。

周囲に漂うデブリも巻き込みながらビームがアヘッドの部隊に命中する。

生き残ったMSはセラヴィーに攻撃を始める。

「第2小隊はスペースシップを！残りはガンダムを引き付けろ！」

アロウズのアヘッド部隊が動き出す。

複数でセラヴィーを追い込もうとビームライフルを連射する。

機動性の低いセラヴィーはGNフィールドを展開し機体を敵のビームから守る。

だがそうしている間にセラヴィーをすり抜けたアヘッドがプトレマイオスに迫ろうとしていた。

ライル・ディランディとスメラギ・李・ノリエガを回収した刹那は

小型輸送船でアロウズとソレスタルビーングの戦いを見ていた。

戦況は思わしくない。

刹那は通信機でプトレマイオスに繋げる。

「イアン、ダブルオーを出す。」

「ちよっ！ちよっと待って刹那、こっちはまだ！」

「時間がない。」

そう言う刹那はシートから立ち上がりニールに操縦を代わらせる。

「何で俺がこんなことを。」

愚痴をこぼしながらもニールは操縦桿を握る。

刹那との通信が終わってしばらくすると完成途中のダブルオーガンダムがカタパルトに移動させられる。

プトレマイオスのMSハッチが開き奥に青い機体が見える。

「アレがソレスタルビーイングの。」

ニールは開いたハッチに向かい操縦桿を操作する。

刹那は青いパイロットスーツに着替えると危険を顧みず小型輸送船から飛び出す。

「ダブルオー、オーガンダムとエクシアの太陽炉を乗せた機体。俺のガンダム。」

スーツのバーニアを噴かしてカタパルトのダブルオーガンダムに乗り込む。

コクピットに入るとパネルを操作しツインドライブシステムを機動させようとする。

「刹那、ダブルオーはまだ」

「トランザムを使う。」

「無茶だ！刹那止せ！」

イアンは画面越しに必死に刹那を止めようとするが聞こうとしない。

「トランザム始動！」

機体が赤く光りだし戦闘画面にトランザムと表示される。

それでもGNドライブの安定機動には至らない。

「トランザムでもダメか。」

「MS2機急速接近中ですよ！」

GNドライブから緑の粒子が発生する。

「目覚めてくれダブルオー」

次第に粒子量が増えて行く。

「ここにはオーガンダムとエクシアと」

セラヴィーとプロトレマイオスの攻撃を抜けたアヘッドが目の前でビームライフルを構える。

「俺が居る！」

ツインドライブを前方に出し大量のGN粒子を放出する。

それによりアヘッドのビームライフルは掻き消されてしまう。

ダブルオーのツインドライブから放出されるGN粒子がプロトレマイオスからも溢れ出す。

溢れ出たGN粒子が渦のように動き宇宙に光の橋を作り出す。

光の橋から何かに導かれるように1機の白いMSが流れてくる。
それは可能性と言う名の獣。人類の革新。

「ダブルオーガンダム、刹那・F・セイエイ出る！」
これから人類はどう進化していくのだろうか。

第一話 可能性の獣（後書き）

コメントお待ちしております。

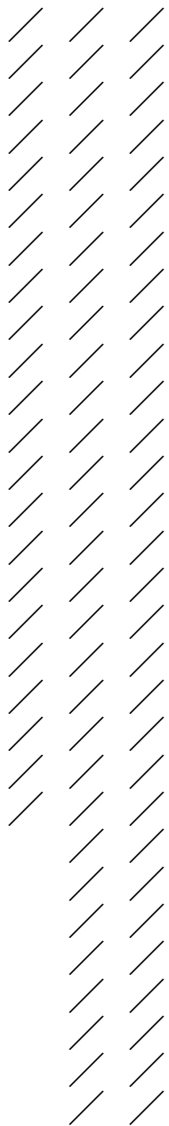
たくさん書いてくれるとうれしいです。

第二話 白亜の機影（前書き）

毎度の如く話は短いです。

第二話 白亜の機影

緑の粒子に惹かれるように白亜のMSはゆっくりと流されていく。



ツインドライブの起動したダブルオーガンダムがプロレマイオスから出撃する。

GNドライブを2機搭載した事により粒子量が格段に増大している。

「新型！？各機散開して叩け！」

アヘッドはビームライフルで牽制しながらダブルオーを囲い込もうと行動に移る。

ビームが雨のように放たれるが高い機動性を持つダブルオーはビームを寄せ付けない。

「ダブルオー、目標を駆逐する！」

刹那はビーム攻撃を避けるとGNソードに装備されているビームライフルを使う。

ツインドライブの高出力により大型砲にも匹敵する威力と射程を発揮している。

「なっ！？何だと！」

発射されたビームがアヘッドを脆くも破壊する。

「何だあの性能は！」

アヘッドの部隊はダブルオーの性能に驚きを隠せないで居た。

今のMSにはGNドライブが標準搭載されている。

4年前のようにガンダムに遅れを取るはずがない。

陣形を整えもう一度ダブルオーに攻撃を仕掛けようとする。

残ったアヘッド全機で一斉にビームライフルを発射する。

「GNフィールド作動。」

両肩のGNドライブが前方に移動すると大量のGN粒子がダブルオーを覆う。

アヘッドのビームは再びGN粒子に掻き消されてしまった。

だがジnkスのパイロットはその性能を逆手に取る。

腰にマウントされているビームかく乱幕のグレネードを投げつける。

グレネードは爆発するが周囲に被害は無い。

ダブルオーはGNソードのビームライフルを使うがビームかく乱幕によりビームがジnkスまで届かない。

「これでビームは使えない！接近戦ではコッチが有利！」

右腕にあるGNランスでダブルオーに突撃する。

刹那はGNソードをライフルモードから実体剣に切り替える。

「これが俺達の！」

ダブルオーもGNソードを構えるとアヘッドに接近戦を仕掛ける。

ツインドライブを最大出力にし一気にスピードを上げる。

目前と迫るアヘッド、GNソードを振りかぶる。

GNランスと交わり火花を上げる。

「ガンダムだ！」

GNソードは滑るようにアヘッドの胴体を両断し機体が爆発する。

GNドライブの赤い粒子が爆発と同時に宇宙空間に漂う。

「つく！撤退だ！」

アヘッドの性能では太刀打ち出来ないと判断した部隊長が残ったMSの撤退を始める。

だがそれを見逃すティエリアでは無い。

「ここから逃げられると思うな！」

背中を向けるアヘッドにGNバスターカで砲撃を開始する。

高出力のビームから逃げれずに次々と飲み込まれていく。

「敵MS、撤退して行くですう！」

「取りあえず一安心だな。」

プトレマイオスのブリッジでミレイナとラッセがレーダーで敵の撤退を確認すると安心して声を出す。

戦闘が終わりブリッジに安らぎの空気が漂う。

「待って、C-36ポイント付近からアンノウンが接近中！」

「何!？」

フェルトがレーダーで未確認の兵器を察知すると再びブリッジがピリピリとした空気に変わる。

「映像入りましたですう。」

ブリッジの戦闘画面に小さく機影が映し出される。

物凄いスピードで見る見る内に近づいてくる、映像に映る姿がよりハッキリと映る。

「角？」

「真っ白でキレイですう。」

「・・・」

その姿はさながらおとぎ話に出てくるユニコーンのように見えた。フェルトは冷静に接近するアンノウンに対処しようとデータを採用する。

「現在存在するどのMSのデータとも該当しません。それにあのMSにはGNドライブが搭載されていません。」

そのMSからは擬似GNドライブから放出される赤い粒子が発生していない。

レーダーにもGN粒子の反応は出ていなかった。

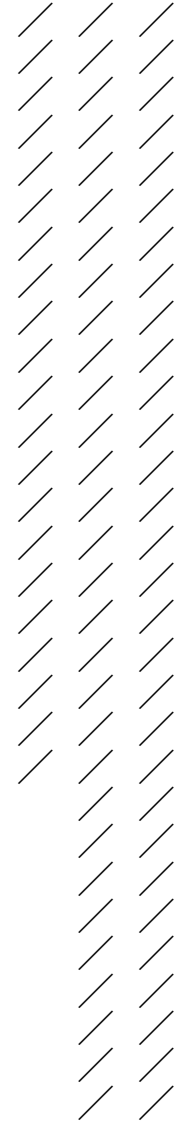
「アイツだ!この不愉快な感覚は!」

「ティエリア、どうしたの？」

突然声を荒げるティエリア、こんなのは今までにもあまり見た事が無い。

プトレマイオスに帰艦しようとしていたセラヴィーが旋廻して離れていく。

方向はあの白亜のMS。



コクピットの中でバナージ・リンクスは眠っていた。

第二話 白亜の機影（後書き）

コメントお待ちしております。

第三話 コンタクト

「ティエリア！」

「コレだ、この不愉快な感覚は同じだ。」

謎のアンノウンに向かうティエリアを刹那は呼び止めようとするがセラヴィーはスピードを緩めない。

このままではアンノウンと接触してしまう。

刹那もダブルオーをアンノウンの方向に向けて飛び出す。

しかしダブルオーの機動性でもセラヴィーに追いつく頃にはアンノウンと接触しているだろう。

「この頭の中を覗かれるような感触は何だ？」

ティエリアは依然不愉快な感覚に包まれたままだった。

近づくにつれてその感覚も大きくなっていく。

何故かはわからないがアレを落とせばこの奇妙な感覚も治るのではと感じた。

セラヴィーを全速力でアンノウンに向かわせる。

「見つけた！」

真っ暗な宇宙空間であの真っ白な機体の色はよく目立つ。

レーダーの反応よりも早く捉えたティエリアはGNバズーカを構えさせる。

「高濃度圧縮粒子開放。」

背部の装甲がスライドし顔が浮かび上がる。

GN粒子が大量に発生し銃身にエネルギーがチャージされていく。チャージされたエネルギーはピンク色のボールのように形成されている。

「ダブルバズーカ、バーストモード。」

高出力のビームが玉となって発射される。

ビームはデブリを破壊しながらアンノウンに飛んでいく。

白い機体はバーニアを吹かし高速で迫るセラヴィーのビームを右に一回転して回避してしまう。

「動きに隙が多い！」

連結したGNバズーカを切り離す。

GNキャノンとGNバズーカの6門でビームの弾幕を張る。

数もさることながらセラヴィーの特性からビームもすべてが高出力である。

白い機体は次第に追い込まれていく。

ビームが機体をかすめる。

ビームの弾幕を避けきる事は難しく激しくバーニアを吹かしアンバツクで機体を制御する。

だが必死に避けきっても最後には隕石にぶつかってしまい動きが止まってしまう。

それを見逃すティエリアでは無い。

GNバズーカを両肩に乗せるとすぐさまチャージを開始する。

「貰った！」

ツインバスターキャノンのビームを避ける事は不可能。

ビームの光りに白い機体が照らし出される。

左腕のシールドを構えて最後の抵抗をする。

「無駄だ、そんなシールドで防ぎきれない。」

白い機体のシールドがX字にスライドする。

シールド中央には丸いエネルギー発生器が着いている。

「！？そんな・・・」

ビームはシールドに直撃する寸前で弾かれてしまう。

ビームが途切れるとシールドはまた元の姿に戻った。

「ならば接近戦で！」

ビームサーベルを引き抜く。

白い機体には武器らしきものは見当たらない。

「沈めー！ー！」

ビームサーベルを振りかぶる。

だが今度は右腕からトンファーのように白い機体もビームサーベルを発生させセラヴィーの攻撃を受け止めてしまう。

「くっ！このまま押し切る！」

GNドライブの出力を上げると2機をGN粒子が空間を漂う。

出力を上げてでも押し切れない事にティエリアは焦り始める。

「お前はいったい何なんだ！」

白亜の機体のツインアイが鋭く光る。

装甲の隙間から鮮やかなピンクの粒子があふれ出す。

ティエリアの乗ったセラヴィーは何かにつ張られるように白亜の機体から引き離される。

コクピットのフレームが動き出しパイロットを包む揺り籠のようになる。

胸の装甲がスライドし内部のフレームがあらわになる。

「これは・・・」

スカートや脚部の装甲もスライドし機体の全体像が変貌する。

ランドセルが左右に展開し4機的大型バーニアが、シールドもX字に展開する。

フレームがピンク色に発光しGN粒子とは違う謎の粒子が舞う。

ティエリアは変わった姿に目を見開く。

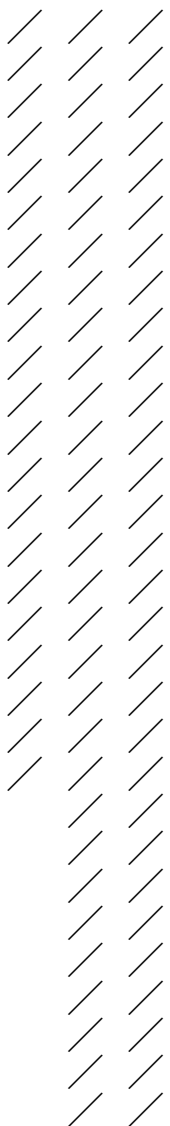
それはセラヴィーを追いかけていた刹那にも見えていた。

もうすぐ傍まで来ていた時にソレは起こった。

象徴である角も割れフェイスガードも格納される。

変貌したその姿はまるで・・・

「ガンダム！！！！」



ヴェーダを通じてリボンズも白亜の機体の変貌した姿を見ていた。

初めはダブルオーのツインドライブシステムを見る為だった。

しかしそれ以上に衝撃的なことが起こっている。

ヴェーダにはあの機体のデータは載っていない。

ヴェーダに載っていないガンダムが何故ココに居るのか。

「あの機体は何だ？」

「へえ、レベル7まで掌握したキミにも分からないんだ・・・」

ソファアーに座るリボンズにリジエネはからかう様に言う。

「・・・・・・・・」

「ふふっそんなに怒らないでよ。」

「そんな事は無いよ。」

「どうなると思う？」

「アイツの戦闘能力は未知数だ。成り行きを見守る事にするよ。」

そう言うとりボンズは微笑む。

デストロイモードに変身したユニコーンガンダムとセラヴィーガンダムとダブルオーガンダムの戦闘が始まろうとしていた。

第三話 コンタクト（後書き）

コメントお待ちしております。

第四話 新たなガンダム

デストロイモードへと変化したユニコーンガンダムが動き出す。
ランドセルからビームサーベルを引き抜くとティエリアの前から姿が消える。

「!?!」

サイコフレームの作用で今までとは比べ物にならないほどの機動性にティエリアは反応出来ない。

あまりのスピードにさながら瞬間移動のように見えた。

気づいた時には右手に握っていたGNバスターが切断されていた。

「この力は!?!」

破壊されたGNバスターを放棄しユニコーンガンダムを捕らえようとする。

サイコフレームの輝きがユニコーンを照らす。

ユニコーンが移動するとそこには赤い粒子が漂っていた。

「コレ以上はやらせん!」

ユニコーンとセラヴィーのビームサーベルが交わる。

「ティエリア、援護する!」

ダブルオーもGNソードのライフルを動きの止まったユニコーンへ連射する。

だがデストロイモードになったユニコーンの反応速度の前ではこの程度の攻撃は余裕で回避出来る。

セラヴィーの胴体を蹴り飛ばすとその反動を利用しビームを回避する。

照準をダブルオーに絞るとまた姿が消える。

「早い!?!」

すると視界から消えたユニコーンが背後から迫る。

「そこか!」

GNビームサーベルを引き抜き振り向き様になぎ払うとユニコーン

のビームサーベルと鏢迫り合いになる。

そのまま握っているGNソードでユニコーンを斬りかかろうとする。

「防いだ!？」

X字のシールドがコレを防ぐと頭部のバルカン砲がダブルオーを襲う。

「くっ!」

バルカン砲から逃れるために距離を取りながらツインドライブを前方に出し弾を防ぐ。

「刹那、挟み込む。」

「了解、攻撃行動に移る。」

ユニコーンにはバルカン砲とビームサーベルしか武装は見当たらない。

二人は射撃戦で仕留めようとする。

それでもユニコーンはバーニアを使った俊敏な動きで2機のビーム攻撃を避けきる。

機械制御による操縦で動きは直線的だが圧倒的なスピードで攻撃を寄せ付けない。

縦横無尽に動き回るユニコーンは右手に握ったビームサーベルをセラヴィーに投げる。

回転してピンク色に円を描きながら真っ直ぐに飛んでいく。ティエリアは高濃度のGNフィールドでコレを弾き飛ばす。

「何処だ!？」

「下から来るぞ!」

防いでいる間に又してもユニコーンの姿を見失ってしまう。セラヴィーの足元にビームサーベルが届こうとしていた。

「やらせるものか!」

GNキャノンに付いている隠し腕からセラヴィーもビームサーベルを出す。

寸前の所で直撃を免れるがユニコーンも左腕に装備されているサーベルラックを稼動させもう一撃加えようとする。

「まだもう一本残っているのか！」

迫るビームトンファア、今からでは防ぎきれない。

ティエリアは覚悟を決めた。

「トランザム！！！」

セラヴィーの装甲が赤く発光し瞬時にユニコーンから離れる。

ビームトンファアが何も無い空間を斬りさく。

「はあああっ！！」

ダブルオーのGNソードをユニコーンがシールドで受け止める。

「離れろ、刹那！」

トランザムを発動させたセラヴィーが隠し腕を出し6本のビームサーベルを持つ。

刹那がユニコーンから離れるとセラヴィーのビームサーベルによる連撃が始まる。

右から、左から、6本のビームサーベルで斬りつけるがユニコーンも残った3本のビームサーベルとビームトンファアで格闘戦を仕掛ける。

手数はセラヴィーの方が多いがユニコーンの反応速度が勝っていた。ユニコーンが斬り抜けるとセラヴィーの右手が、両肩のGNキャノンの隠し腕が切断された。

「なに！？トランザムまで！」

「後は俺がやる。ティエリアは離脱を！」

「くっ！！」

ティエリアは損傷した機体でバーニアを全開にし最後の攻撃を仕掛ける。

アンバックで姿勢制御し振り返るユニコーンに体当たりをする。

セラヴィーの重い機体重量がユニコーンを吹き飛ばす。

「くうううっ！」

当然ティエリアにもその衝撃は伝わる。

吹き飛んだユニコーンはバーニアを噴かすが間に合わずデブリに背後から激突する。

「ティエリア！無事か？」

「機体の損傷が激しい。これ以上は・・・」

「ヤツは・・・！」

ユニコーンのサイコフレームの光りが無くなっていく。

鮮やかなピンクはグレーに変わりただのフレームになる。

装甲もスライドし元の姿へ戻っていく。

数秒で角の付いた白亜の機体になる。

「元の姿に戻った！？」

「どうする、破壊するか？」

「・・・いや、トレミーに連れて行く。僕の記憶ではヴェーダにこのガンダム データは無い。調べる必要がある。」

「了解、アンノウンを捕獲する。」

ダブルオーが動きの止まったユニコーンの腕を掴みプトレマイオスまで引っ張っていく。

ユニコーンのコクピットの中でバナージ・リンクスはまだ静かに眠っている。

第四話 新たなガンダム（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

第五話 目覚めの時（前書き）

コメント、アドバイス等お待ちしております。
良い事も悪いこともじゃんじゃん書いてください！

第五話 目覚めの時

プロトレマイオスに帰艦するセラヴィーとダブルオー、そして突然襲い掛かってきた謎の機体。

ガイドビーコンに沿って着艦準備に入る。

ダブルオーが腕を引っ張りユニコーンをゆっくりと格納庫に移動させる。

「そいつは一番奥に入れろ、カタパルトへ固定させる。」

「了解、セラヴィーはどうなっている？」

「手痛くやられているな。まったく！新型だつつのに！」

イアンは愚痴を零しながら刹那を誘導しユニコーンを移動させる。ユニコーンの足をカタパルトが大きな音を立てて固定する。

「よし、刹那もダブルオーを固定させろ。整備に掛かる。」

「分かった、後は頼む。」

ダブルオーをユニコーンの前に配置するとコクピットから下りていく。

ハロを積んだ無人機が数機ダブルオーに飛んできて修理に入る。

「やれやれ、相変わらず愛想が無いな。それよりも・・・」

イアンは回収された白い機体を見上げる。

「この角付き、詳しく調べる必要があるな。ハロ付いて来い。」

「ツノツキ、ツノツキ」

黄緑色のハロは耳をパタパタさせてイアンの後に付いて行く。

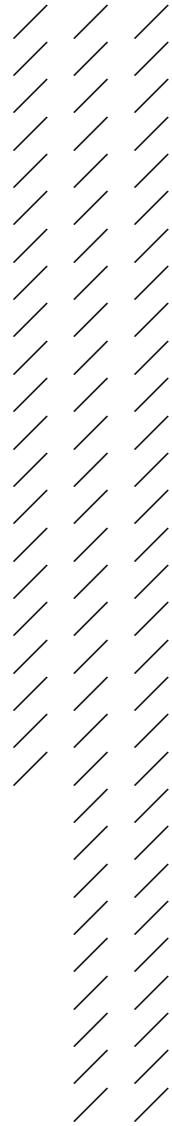
パネルを操作しハッチを開放しようとするがプロテクトが頑丈に作られており簡単には開かなかった。

何度もパネルを操作するがどのパターンを試してもエラーが出てしまう。

「何だこのプロテクトは？ただハッチを開けるだけだぞ！？」

ハッチに近づいてきたハロの口からケーブルを出しユニコーンに繋げる。

それでもプロテクトを破るには時間が掛かる。



刹那はイアンに整備を任せるとMSデッキからブリッジに移動する。グリップを握り足を浮かせて向かっている途中にティエリアと会う。先ほどのティエリアらしからぬ行動に疑問を感じていた刹那はその事について聞いてみた。

「あの白い機体、何故かは分からないがとても不愉快に感じた。」

「それだけであんな行動を取ったのか？」

「これでは理由にもならないな。昔のキミの事を言えない。」

刹那は気にせず話を続けた。

「ティエリア、あのガンダムについて何か情報は有るのか。」

「ヴェーダにはあの機体の情報はやはり載っていない。イアンからの解析結果を待つしかない。」

「そうか・・・」

落胆の表情を浮かべる刹那、二人で話していると小型輸送船からスメラギとライルがプロトレマイオスに乗艦する。

ノーマルスーツを着た二人と鉢合わせになる。

「よお！ いやスッゲエなガンダムって。」

刹那とティエリアがギロリと睨み付ける。

空気もピリピリとしておりライルは完全に場違いだった。

「あら？」

「・・・刹那、二人の事は任せる。僕はイアンとあの角付きを調べに来る。」

ティエリアはそう言い残しグリップを掴んで行ってしまう。

一人残る刹那にライルが近寄り話しかける。

「アイツは驚かないんだな、俺の事。」

「・・・ブリッジまで案内する。スメラギも来てくれ。」

刹那は二人を案内しようと歩いて行く。

スメラギは顔を俯け無言で刹那に付いて行く。

「やれやれ、感動のご対面って訳にはいかないか・・・」

刹那がブリッジのドアを開けるとクルーが迎え入れてくれた。

みんなスメラギの顔を見ると立ち上がり駆け寄る。

「スメラギさん！お帰りなさい。」

「お久しぶりです、ノリエガさん。」

「相変わらずだな。」

スメラギは暗い表情のままだった。

刹那に連れられてプトレマイオスに来たが彼女はまだソレスタルビーンダに戻る決意を固めては居ない。

「私は・・・」

隣からライルもブリッジに入ってきた。

ライルを見ると一同に驚く。

「ロックオン・・・」

フェルトは目に涙を浮かべた、でもどうして彼がココに・・・

「ロックオン、イキテタ、ロックオン、イキテタ」

「どうゆう事だ、どうしてロックオンが!？」

「熱烈な歓迎だな。」

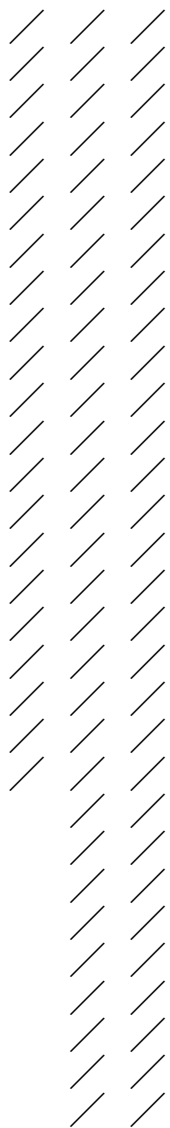
驚くクルーに事情を説明するスメラギ、でも表情は変わらない。

「弟さん、なんですって。」

「そうゆう事だからこれからよろしく!」

ライルが自己紹介をしているとMSデッキのイアンから通信が入る。

「白い機体のハッチが開いたぞ!」



ハロが10分程掛かりハッチを開けた。

ハロには最新鋭の電子プログラム機能が搭載されている。にも関わらずハッチ一つ開けるのに10分も掛かるのは異常だった。

それだけこの機体のプロテクトが頑丈に組まれている。

「よくやったぞハロ。」

「アイタ、アイタ」

イアンはその事をブリッジに報告する。

「白い機体のハッチが開いたぞ！」

ノーマルスーツの通信機からそう言うハッチを潜りコクピットを覗き込む。

そこには機体と同じ白いパイロットスーツを着た少年、バナージ・リンクスが居た。

第六話 片鱗（前書き）

アドバイスがあればどんどん書き込んでくれるとうれしいです。

第六話 片鱗

コクピットを開けたイアンは中から白いパイロットスーツを着た少年を引っ張り出す。

無重力なので重さはあまり感じなかった。

シートから体を浮かせ両腕で抱え込むとそのまま足で床を蹴りコクピットから後ろ向きに出て行く。

抱えた体を床に仰向けに寝かせヘルメットを取る、その顔は10代の様に見えた。

「こんな子供が操縦していたのか!？」

白い機体のパイロットが子供だったことに驚愕するイアン。

こんな子供が最新鋭のガンダム2機、刹那とティエリアの相手をしていたなんて。

機体の性能も然る事ながらその事に驚いていた。

ガンダムマイスターの刹那もソレスタルビーングのメンバーになったばかりの頃は14歳だった。

そのころはモビルスーツに乗った事など無く、シミュレーターで訓練する日々が続いた。

刹那の専用機、ガンダムエクシアが与えられたのはそれから2年後だ。

当時の技術レベルのはるか先に行くガンダムは他のモビルスーツなど相手にならない。

それでも数で押されたり、パイロットの技量の差で窮地に立たされる事もあった。

刹那は数多の戦いを得て今ではソレスタルビーングを支えるガンダムマイスターになっている。

そんな彼らをこの少年はたった一人で・・・

思う事は多くあるがイアンはこのパイロットをメデイカルルームへ運ぼうと体を抱えようとした。

「その少年が、この機体のパイロットなんですね。」
後ろから声が聞こえ振り向くと少年の顔を凝視するティエリアが居た。

メガネ越しに見える目はいつもより鋭いように見える。

「ティエリアか、丁度いい。この子をメディカルルームへ運んでくれ。」

「……！」

ティエリアは顔をじっと見たままで返事は無い。

「……」

「ティエリア……どうした？」

「……いえ。白い機体の解析はどうになりましたか？」

「今からやる所だ。ハッチのプロテクトがなかなか破れなくてな。こりゃあ、手こずりそうだ。」

「分かりました、解析が終わったら知らせてください。この少年は僕が見ます。」

「ああ！そっちも頼んだぞ。」

ティエリアは寝かせていた少年の体を抱えるとメディカルルームに向かい歩き出した。

その後姿を見るとイアンは機体の解析を再開する。

／／／
／／／
／／／

「この子供がああ白い機体のパイロット……」

MSデッキを出たティエリアは白い機体のパイロットを抱えて歩いて行く。

少年は目を閉じたまま意識がない。

そんな彼を見ていると自分の心の中を見透かされているような感覚に陥ってしまい不愉快だった。

とは言えあの機体を回収すると言ったのは自分であり、無抵抗な人間をこのままにもしておけずイアンの指示に従っている。

艦内を進んでいるとスメラギが一人立ち尽くしていた。

まだソレスタルビーングの制服に袖は通していない。

人を抱えて進んでおり目立つ筈なのに彼女はこちらを見なかった。

ティエリアはそのままスメラギに近寄り話しかけた。

「こんな所でどうしたんですか？」

「ティエリア・・・」

ゆっくりと振り向くがすぐに下を向いてしまう。

今の彼女に4年前の面影は無かった。

「その様子だと、まだ決心は付いていないようですね。」

「それは・・・」

「これからアロウズと戦っていくにはあなたの戦術予報が必要になる。」

「それでも！・・・もう、私は・・・」

「・・・そうですか。では、僕はこれで失礼します。彼を連れて行かないといけませんので。」

ティエリアの彼と言う言葉を聞いてスメラギはやっと気づく。

白いパイロットスーツを着た少年がティエリアに抱えられている事を。

「っ！？何なの・・・！」

その少年を見ると不思議な感覚に包まれた。

艦内に居る筈なのに一瞬宇宙が見えた。

きつと疲れているんだと、目を閉じ頭を振った。

「どうしました？」

「ええ、何でもないわ。その子はどうしたの？」

「先ほど遭遇したアンノウンのコクピットの入っていました。おそらくパイロットと思われます。意識が戻らないので今からメディカルルームに連れて行く所です。」

「アンノウン？」

「アロウズとの戦闘後に突然襲い掛かってきた謎の白い機体です。今は解析中で詳しい事はまだ分かりません。このパイロットの意識が戻り次第尋問を行います。」

「尋問って・・・まだ子供なのよ。」

「あのモビルスーツは危険です。ですがこちらで使用出来れば強力な兵器になります。そのためにも、そのパイロットから話を聞かなければなりません。それに4年前の刹那もこのパイロットと同じ年代です。子供といえど厳重な警戒が必要です。」

ティエリアの言う事に何も言い返せない。もう自分には関係ないと、割り切るしか無かった。

「では、僕はこれで。新しく来たマイスターの訓練もありますので。」

「
それだけ言うと少年を抱えて立ち去ってしまった。」

スメラギはティエリアの姿が見えなくなると自室に戻った。

扉のロックを解除し部屋に入ると明かりも付けずにベッドに倒れこんだ。

第六話 片鱗（後書き）

コメントお待ちしております。

第七話 救出作戦（前書き）

コメント、アドバイス等お待ちしております。
たくさん書き込んでいただけるとモチベーションが上がるのでうれしいです。

ルを乗り込ませた。

「これがキミのガンダムだ。」

「へえ、やっぱスゲエな。」

「これはキミの専用機だ。これからの訓練で操縦法を覚えてもらう。」

「お手柔らかに頼むよ。」

「モビルスーツの戦闘経験は？」

「あるわけないだろ。作業用のワークローダーに乗ったぐらいだ。」

「まったくの素人を連れてきたのか、刹那め！」

「だからさ、やることいっぱいあるだろ。よろしく頼むよ、かわいい教官殿。」

「茶化さないでほしい。」

ライルはコクピットから手を伸ばし握手を求めるが無視された。

見た目は同じでもニール・ディランデイ、ロックオンとは違う。

その様子をフェルトは画面越しに見ていた。

ロックオンが死んでしまった事をもう一度直視することとなってしまふ。

「ロックオン・・・」

静かに呟くとパネルを押してライルの映っている画面を消した。

沙滋・クロスロードはプトレマイオスの収容所に入れている。

刹那に連邦軍の強制労働から逃がしてもらい状況に流されてここまで来てしまった。

もうここに居る以上は戦争に加担している事になるのだろうか。

4年前の事故から会えていないルイスはどうしているだろう。

思う事は沢山あったが今は自分の出来る事をしようと考えていた。

食事を運んできて貰った時に一緒に渡された赤いボールのようなロボット、ハロを使いこの艦のデータバンクを調べていた。

調べるのは4年前のあの事件だ。

ソレスタルビーイングは武力介入で戦争を無くすと宣言していたの

に無関係なルイスの家族や一般人に襲撃した。

そのせいで両親は死にルイスは左手を無くした。

ハロの口らしき部分からケーブルを引っ張り出し収容所の設置されているコンピューターに繋げる。

データバンクから4年前の出来事をしらみつぶしに探した。

もう何時間と時間が経過した時に気になるデータがあった。

「スローネによる民間人の襲撃・・・？」

パネルをタッチしデータを閲覧する沙滋。

すると突然部屋のロックが解除され扉が開いた。

「刹那！？」

「食事だ。」

一言そう言うのと奥からトレーを持ってきた。

沙滋はソレを受け取ると食事には手を付けずに床に置いた。

「どうした？」

「・・・刹那、一つ聞きたい事があるんだ。」

閲覧していたデータを刹那に見せ真実を聞き出そうとした。

刹那は差し出されたコンピューターの画面を見ると言葉を発した。

「確かに記録にあるように俺達とスローネは別の立場で武力介入を行っていた。」

「仲間じゃないと。」

「ああ」

「それでもキミ達は同じようにガンダムで人を殺し、僕と同じ境遇の人を作ったんだ。キミ達は憎まれて当たり前の事をしたんだ。」

「・・・分かっている。」

「世界は平和だったのに・・・当たり前の日々が続くはずだったのに・・・そんな僕の平和を壊したのはキミ達だ！」

「自分だけ平和ならソレでいいのか？」

「そうじゃない、でも誰だって不幸になりたくないさ。」

「不幸か・・・ならコイツはどう思っているんだろうな？」

沙滋は扉の奥を覗き込んだ。

そこにはタンカーに寝かされた少年が居た。

「その子は・・・？」

「体には異常は無いのに意識が回復しない。原因は不明だ。」

「そうじゃなくて、その子をどうするの？」

「コイツはモビルスーツに乗って俺達に戦闘を仕掛けてきた。一人にして置く訳にはいかない。沙滋、お前が見ていてくれ。」

刹那はその少年の体を抱えると収容所のベットに寝かせた。

「ちょっと待って、刹那！」

「何かあれば連絡してくれ。すぐにクルーが駆けつける。」

それだけ言い残すと刹那は沙滋の静止を聞かずに出て行った。

扉は閉まりロックを掛けられてしまい内側からは開かなくなってしまった。

「そんな事言ったって・・・」

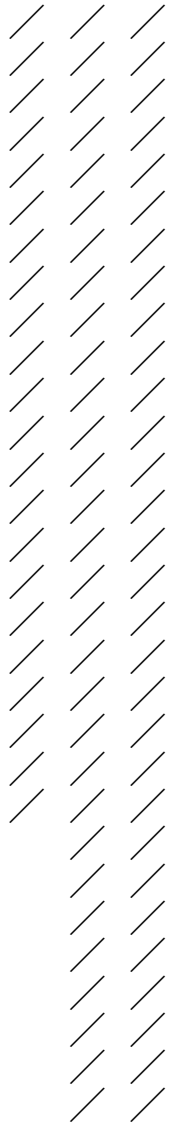
落胆して床に座り込んでしまう。

ベットに寝かされた少年に振り向くと目が合った。

「え・・・」

虚ろな目で少年がこちらを見てくる。

まるで心が引き込まれるようにその瞳を見続けた。



「王留美からの暗号通信です。反政府勢力収監施設、アレルヤ・ハプティズムを発見！」

「知ってます。その人、マイスターさんです。」

「そうか、連邦に捕まっていたのか。道理で行方が分からない訳だぜ。」

4年前の戦闘でキュリオスは敵に捕獲されてしまい、そのままパイロットであるアレルヤは捕まってしまった。

今までも搜索はしていたが戦力も整っておらず危険な行動は出来なかった。

それでもいつか奪還する事を信じて彼の新しいガンダムも製造してある。

アレルヤを奪還する為にブリーフィングルームでミーティングを開く。

プロレマイオスの全クルーを呼び出した。

みんなが制服を着て集まってくる中スメラギだけが胸元のはだけたシャツで来た。

「アレルヤが見つかったって本当なの？」

「ああ、王留美からの確定情報だ。これから救出作戦を始める。」

「救出って、どうやって？」

イアンの言葉を理解出来ないでいた。

「アンタに考えて欲しい、スメラギ・李・ノリエガ。俺達に戦術予報をくれ。」

刹那は前に出てスメラギを説得するが彼女はまだソレスタルビーングに戻る気は無かった。

「アレルヤが戻ればガンダム4機による作戦行動が可能になる。」

「それでも心許無いがな。」

ライルが刹那の言葉に水を刺す。

隣に居てそれを聞いたティエリアが彼を睨み付けた。

「おおっと!？」

さすがに場の空気を察してこれ以上は言わなかった。

目線を反らし黙って成り行きを見守った。

「スメラギさん。」

「コレは・・・」

フェルトはスメラギに制服を手渡そうとする。でも彼女は受け取らなかった。

「やめてよ、そうやって期待を押し付けしないで。私の予報なんて何も変える事が出来ない。みんなを危険に晒すだけよ。」

スメラギは背を向けてブリーフィングルームから出て行こうとする。昔も、4年前も何も変える事が出来なかった。今回だって・・・

「後悔なんてしない！たとえミッションに失敗しようとアンタのせいになんてしない。俺達はどんな事をしてでもアレルヤを、仲間を助けたいんだ。頼む、俺達に戦術をくれ。」

「・・・フェルト、後で現状の戦力と状況のデータを教えてくれる。」

「スメラギさん！」

スメラギは振り向く事なくそのままブリーフィングルームを出て行った。

第八話 引かれる魂（前書き）

すみません、あまりストーリーが進んでいません。

第八話 引かれる魂

プトレマイオスはアレルヤの救出の為資源衛星から発進する。
ガンダムマイスターはパイロットスーツに着替え各自のモビルスーツに向かう。

王留美からの情報は正確でアレルヤの収監されている場所が提示されていた。

「すごい！収容されている人達の名前や場所が正確に記されている。」

フェルトはデータを見てアザディスタン王国の皇女マリナ・イスマイールの名前がある事に気づいた。

「この人・・・」

王留美の情報を元にスメラギはミッシュンプランを考えていた。
データを睨み付ける様にくまなくチェックする。

「この空母の粒子ビームを押さえられれば。」

だがスメラギは収容施設の襲撃作戦以上に気になる事があった。
パネルに触るとライル・ディランディのプロフィールが画面に映し出される。

「彼のこの能力値の高さ、いったいどう言う事？」

ただの一般人にしては銃火器の扱いやモビルスーツの適正が高かった。

普通ではこの様には成らない。

気にはなるが今は一人でも戦力が必要な時だ。

彼の能力値を信じてプランを組み立てるしかない。

パイロットスーツに着替えたロックオンとティエリアがグリップを握り移動する。

「ついに実戦だな。」

「キミに出番があるとは思えない。」

ティエリアが先頭に立ちMSデッキへ向かう。

その表情はいつもと変わらず冷めていた。

後ろに居るせいで顔は見えないがロックオンは容易にその表情が想像できた。

それを想像し鼻で笑った。

「そいつは気が楽だ、頼りにしてるぜ。」

「・・・」

無言でティエリアはデッキのセラヴィーに取り付く。

ハッチを開放しコクピットに乗り込み脚部をカタパルトに固定させる。

「セラヴィー、専用バズーカ装備です。」

通信が入るとバズーカを掴んだアームが前方にやってきた。

機体の両腕を前に出しGNバズーカを装備する。

刹那のダブルオーは発進直前までイアンが調整していた。

「ツインドライブ、起動したはいいが安定には程遠い。トランザムを使うなよ。」

青いパイロットスーツを着た刹那にそう告げる。

「了解、サポートを頼む。」

ヘルメットを被りダブルオーのコクピットに乗り込む刹那。

シートに座るとスメラギからミッシェンプランが送られてきた。

「300秒で施設を襲撃、混乱に乗じてアレルヤを救出。」

他のマイスター達にもミッシェンプランは送られている。

ソレを見たティエリアは鼻で笑った。たった3機では無謀もいい所である。

「それでこそスメラギ・李・ノリエガ」

ライルも一樣ケルディムのコクピットで待機していた。

しかし作戦前だと言うのに緊張感は無くいつもの調子でミッシェンの内容を見た。

「アレ？俺にもやる事あんの！？まあ、そっちの方が都合がいいか。」

「ナンノコト、ナンノコト」

「何でも無いよ。サポート頼むよ、ハロさんよ！」
コクピットに居るオレンジ色のハロを叩く。

各機カタパルトに固定されいづでも発進出来る体制に入る。
そんな中ティエリアは刹那に通信を入れる。

「刹那、アレルヤが収監されている場所にこんな名前が。」

ティエリアは刹那の機体に王留美から送られたデータを送った。

データにはマリナ・イスマイルと書かれていた。

「マリナ・イスマイルがアレルヤと同じ施設に居る!？」

刹那は悩む素振りを見せたがすぐにデータを閉じた。

するとプトレマイオスは大気圏突入の体勢に入る。

「GNフィールド最大展開、大気圏突入を開始します。」

フェルトがプトレマイオスの全クルーに通信で伝えるとパネルを操作しGNフィールドを展開する。

GNフィールドを展開したプトレマイオスが大気圏に突入して行く。

大気の摩擦が艦を包み赤くなる。

熱を防ぎながらプトレマイオスはアレルヤの囚われている連邦軍の収容施設に向かう。

揺れる艦内で沙滋はベッドにしがみ付き体を支えている。

「くうううっ!この振動は!?!重力?」

体を支える事で精一杯の沙滋は隣のベッドのバナージにまでは目が行かなかった。

ベッドで眠っているバナージは地球に向かう最中人々の魂を感じ取っていた。

そうして彼も重力に魂を引かれて落ちていく。

「オード・・・リー・・・」

バナージの微かな声に沙滋は気づけなかった。





連邦軍の収容施設は宇宙から降下して来るプトレマイオスをすぐに察知した。

司令官であるカティ・マネキンはすぐさま指示を出す。

「砲撃用意、モビルスーツ隊の発進準備急げ！」

部下に指示を出すところ、ピーリスに直接通信を繋げる。

「ピーリス中尉、敵襲だ。E-57の確保を。」

「了解。」

それだけ言うと通信を切ってしまう。

非検体E-57、アレルヤ・ハプティズムの収容所に向かい歩き出す。

だが突然歩くのを止め周囲を警戒しだした。

「何だ！？この変な感覚は・・・あの男ではない。」

まわり付くような不思議な感覚を感じた。

そうしている間にプトレマイオスの砲撃が施設の一部を破壊し炎が上がる。

「ガンダム・・・！」

ソレスタルビーイングの目的は非検体E-57の救出、そのまえに確保しなければ。

ピーリスは収容所に走り出す。

嫌な感覚はいつそう強くなってくる。

第九話 本格始動（前書き）

コメント、アドバイスお待ちしております。

第九話 本格始動

プトレマイオスはGNフィールドを展開したまま連邦軍の収容施設に一気に降下する。

連邦軍の空母から主砲の一斉射が飛んで来るが減速せずにそのまま突っ切る。

「減速しないでと!？」

カティ・マネキンはプトレマイオスの行動に驚く。

通常ビームを回避しようと艦を旋廻させるはずである。

彼女はその行動の意味をすぐに察知した。

「まさか!？施設の防衛部隊を退避させろ！」

そう叫ぶがもう遅かった。

「GNフィールド最大展開、トレミー潜水モード。」

フェルトがGN粒子の濃度を調整するとラッセはさらにスピードを上げる。

「海に突っ込む！」

プトレマイオスはそのまま急角度で海に飛び込んだ。

大きく水しぶきが舞い津波が発生する。

発生した津波は勢いを増し施設の防波堤を軽々超えてくる。

防衛の為に待機していたモビルスーツの脚部が海水に飲み込まれる。

そのままモビルスーツはバランスを崩して倒れてしまう。

津波はそれだけでは収まらず建造物の足場に勢い付いた海水が当たり施設全体に霧が霧に包まれる。

霧のせいでGN粒子が拡散してしまいビームの威力が下がる。

それに気付いたカティ・マネキンはミサイルで迎撃するよう指示を出す。

海中に居るプトレマイオスにミサイルが直撃するがGNフィールドにより装甲にダメージは無かった。

霧が施設を被っているそのわずかな間にプトレマイオスからガンダムが3機出撃する。

「刹那、ティエリア、粒子ビームの拡散時間は300秒しかないわ。その間にアレルヤを。」

フェルトは施設のモビルスーツ部隊の動きを察知しながら刹那達にその情報を送る。

「了解、180秒で終わらせる。」

「残りの120秒でもう一人助けたらどうだ？」

「・・・マリナ」

そう言うのとダブルオーとセラヴィーは施設に乗り込む。

残ったモビルスーツとトーチカからの砲撃を高い機動性で掻い潜る。一撃も被弾する事無く指定された座標に一直線に突っ込む。

刹那は建造物にダブルオーをめり込むように突っ込んだ。

その影響で大きな振動が周囲に伝わる。

アレルヤの奪還を阻止するべく向かっていたソーマ・ピースは振動で足場を崩し壁にぶつかってしまう。

「くうっ！この振動は！？」

刹那はハッチを開放し施設内部に侵入する。

作戦終了まで時間は残されていない。施設の構造を覚えアレルヤの囚われている場所まで走る。

ティエリアはセラヴィーのGNフィールドを展開し無防備なダブルオーを守る。

ソレスタルビーイングの出現にともないアロウズのモビルスーツも出撃し迎撃行動に入った。

GN-X部隊が侵入したダブルオーにビームを撃つがセラヴィーのGNフィールドが寄せ付けない。

「ここは死守する！」

高濃度のGN粒子のフィールドを通常のビーム兵器では打ち破る事は出来ない。

「何て粒子量だ！？」

「接近して直接叩く！」

フィールドを打ち破れないと見たら迅速な判断で接近戦闘に切り替える。

各機がビームサーベルやランスに持ち替え再度攻撃をしかけた。機動性でかく乱しながら時間差で攻撃するべく連携を取りながら縦横無尽に動く。

だが突如としてレーダーの範囲外からビームが飛んで来る。正確な射撃でGN-Xの1機がコクピットを撃ち抜かれる。

「何だ！？ 別方向からの攻撃！？」

想定外の襲撃にアロウズの部隊はすぐに対応出来ないで居た。ケルデイムのコクピットのスクープを覗き見ながらライルは次の機体に照準を合わせる。

「タオシタ、タオシタ」

「まぐれ、まぐれ。ロックオン・ストラトス、狙い打つぜ！」

GNスナイパーライフルの長距離射撃で敵機をかく乱させる。

アロウズの部隊はケルデイムの攻撃に成す術が無い。

セラヴィーのGNフィールドも打ち破る事が出来ずじわじわと押され始めていた。

内部に潜入した刹那はアレルヤの収容されている場所を突き止めた。

奇襲により敵兵はおらずスムーズに作戦は進む事が出来た。

ロックされている扉に爆弾をセットし爆発させる。

扉は吹っ飛び真っ暗な部屋の中に光りが差し込む。

そこには情報どうり拘束されているアレルヤが居た。

刹那は銃を構え手足を固定させている拘束具を破壊する。

「刹那、どうして・・・」

何も言わずに通信機を投げ渡した。

「そのポイントへ行け。アリオスが来る。」

「アリオス？」

「お前のガンダムだ！」

それだけ言うと刹那は部屋を後にした。

「アレルヤを発見した。アリオスを頼む。」

「了解、トレミー浮上。」

「アリオス射出です！」

刹那からの連絡を受けラッセはプトレマイオスを海上に浮上させる。カタパルトに固定させたアリオスを射出させ再び海に潜る。

刹那はマリナ・イスマイルの収容されている場所に向かう。

その姿を見てアレルヤもすぐに動き出す。

動きにくい拘束衣で指定座標に走り出す。

通信機には内部の構造も載っており指定ポイントには迷う事無く行くことが出来た。

「ここが指定ポイントか・・・」

しばらくするとプトレマイオスから射出されたアリオスが建造物に突っ込んできた。

射出は正確で自分の目の前にはコクピットのハッチを開けた新型のガンダムが居た。

乗り込もうとガンダムに向かう。

「動くな！」

背後には銃を構えたソーマ・ピールスが居た。

「マリー！」

「私はそんな名前では無い！」

「・・・いいや、これがキミの本当の名前なんだ。マリー・パーファシー」

「マリー・パーファシー・・・」

その名前を聞くと脳に昔の記憶が蘇る。

だが今の彼女は超兵としての記憶しか残っておらずそれはとても不愉快だった。

体が、心がその記憶を拒絶する。

「マリー！」

苦しみだす彼女を助けようとするが足元に銃弾が飛んできた。

「まどわすなあー！ー！！！」

ソーマ・ピールスは握った銃をアレルヤに撃ちまくる。
だが照準はさだまっておらずあらぬ方向に飛んでいく。

「くっ！」

それでも銃を握っている今の彼女に近づくのは危険と感じたアレルヤはアリオスのコクピットに乗り込む。

GNドライブを起動させるとメインカメラからの映像がコクピットに映し出される。

苦しそうにもがく彼女が映像に映っていた。

すぐ傍に居るのに助ける事の出来ない事がアレルヤは悔しかった。

「マリー、必ず向かえに来るから。必ず！」

アリオスのバーニアを吹かし施設から脱出する。

刹那もマリナを救出してダブルオーに乗り込む。

「脱出する、掴まっている。」

セラヴィーとキュリオス、ダブルオーもアリオスに続いて脱出を始める。

一方そのころカタロンによる収容者の救出も行われていた。

ソレスタルビーイングの襲撃により混乱している収容施設、囚われている人を多く逃がす事が出来た。

だがその中にマリナ・イスマイルは居なかった。

／／／
／／／
／／／

プトレマイオスに帰艦した4人は各自で休息を取っていた。

アレルヤは拘束衣を脱ぎティエリアと一緒に居た。

「アレルヤ、どうして連邦政府に掴まっていた？ 超人機関の情報を」とコクピットから出てきたロックオンもやってきた。

「いやゝすごいなこの艦は。水中航行すら可能とは。」

ロックオンの姿を見て目を見開くアレルヤ。

「ロックオン！どうして・・・」

「そのリアクション飽きたよ。」

「彼はロックオンではない。弟だ。」

「す、すまない。」

「変わらないな、キミは。」

「そうかい・・・うっ!？」

突然頭を押さえて苦しそうな顔をする。

「この感覚はハレルヤ・・・いや、違う。」

「静かになった。もう戦闘は終わったのかな？」

「セイコウ、セイコウ」

沙滋は艦の揺れがおさまった事に安心した。

ベッドに寝ている少年を見るが以前として状態は変わっていない様に見える。

「病気か・・・ルイスは大丈夫かな・・・」

地球に居る彼女の事を思い出していると突然少年が目を開けた。

「こ、ここは・・・」

「っ!？気が付いたのか!」

いきなりの事で沙滋も驚く。

すぐに通信でクルーに連絡を取る。

バナージはゆっくりと息を吸った。

第十話 対話（前書き）

コメント、アドバイスお待ちしております。
良いことも悪いことも一杯書き込んでくれるとうれしいです。

第十話 対話

アレルヤの救出作戦から数分後、沙滋からの連絡で眠ったままだった少年の意識が戻った事を知る。

フェルトからの報告を受けクルー全員が一度ブリッジに集合した。

「アンノウン機のパイロットの意識が戻ったようです。」

「本当か!？」

その報告に驚くクルー達だがティエリアは冷静だった。

意識が戻った今、謎の白い機体について聞き出さなければならない。

あの戦闘能力は利用価値がある。

それにあのパイロットの身元も特定しなければならぬ。

もしも敵であった場合は・・・

一人無言でブリッジから立ち去ろうとする。

「待って、ティエリア。」

「スメラギさん、どうしました?」

「私も行くわ。」

「でもアナタはまだ戻ると決めた訳では・・・」

「何となくだけど、あの子と話せば何か分かる気がするの。」

「あの少年は、まだ名前すら分かっていないんですよ。何の根拠があつてそんな事を。」

「私もよく分からないわ。でも、決心が付きそうなの。」

彼女は真っ直ぐな瞳でティエリアを見た。

その瞳は酒に溺れていた以前とは違う。4年前の時と同じ。いや、それ以上の意思を感じた。

「・・・分かりました。ただし、尋問の手は子供だからと言って緩める気はありません。」

「それは分かっているわ。」

「では、行きましょう。」

話が終わり二人は沙滋と一緒に居る少年に会いに行く。

二人が出て行きブリッジの自動ドアが閉じる。

「スメラギさん、戻ってきてくれるんですね！」

「らしいな、これで作戦行動もやり易くなる。」

「感激ですう！」

二人は沙滋の居る収容所に向かい歩いた。

収容所に付くまでは二人は何一つ言葉を交わさなかった。

「ここです。ロックを解除します。」

「ええ、お願い。」

ティエリアが扉に付いているパネルを操作しロックを解除するパスワードを入力する。

数秒でパスワードの入力は終わりロックが解除されると扉も開いた。中に入ると目を覚ました少年がベッドに座り沙滋と何か話していた。白いパイロットスーツはもう着ていない。

ティエリアとスメラギが来た事で沙滋は少し戸惑っているようだった。

「ちょっと、いきなり！」

「目は覚めたようだな。」

「アナタは・・・」

「一緒に来てもらう。キミには聞きたい事が山ほどある。」

「拒否権は、無いんですね。」

「そうだ。」

「・・・分かりました。」

バナージは今までの経験で抵抗した所で変わらないと分かっていた。相手はコチラの情報を欲している。

元は唯の一般人が軍人からの尋問に耐えられる訳が無い。

なら今は素直に従うしかなかった。

バナージがベッドから立ち上がると二人は部屋から出た。

ティエリアとスメラギの後に続きバナージも部屋から出て二人に付いて行く。

沙滋は一人部屋に取り残されてしまうと扉のロックが掛かる。バナージは別の部屋に連れて行かれるとイスに座らされた。

部屋の内装は白色で統一されており尋問するには不向きに思えた。(それにしてもココは何処なんだ？ジオンじゃない、連邦軍にも思えない。)

するともう一人の女の人に向かいのイスに座ってきた。

紫色の服を着た男は部屋の隅に立ってコチラを睨んでいる。

「意識が戻ったばかりで悪いのだけれど、私の質問に答えてもらわ。」

「抵抗しても無駄なんでしょ。」

「そうね、だから正直に答えてちょうだい。そういえばまだ名前を聞いていなかったわね。」

「バナージ・リンクスです。インダストリアル7の78番街に居ました。」

「名前だけでよかったんだけど、まあいいわ。私はスメラギ・李・ノリエガ」

「本名じゃ無いんですね。」

「悪いけど教える事は出来ないわ。」

今まで連邦とジオンを行き来している内に軍隊の本質を自然と覚えてしまった。

この後に聞かれる事を想像し無意識に聞かれていない事も答えてしまった。

「あの白いモビルスーツは何？軍のデータベースにはあの機体のデータは記載されていなかったわ。」

やはりその事かと思った。

ユニコーンの事はごく一部の人間しかその存在を知らない。

希少価値の高いサイコフレームを使っているアノ機体を見逃してくれるはずがない。

そう考えていたら思いもよらない事を彼女は言った。

「今のモビルスーツにはGNドライブが標準装備されているのにあ

の機体には無かった。なのにガンダムと対等に戦っていたわね。」
GNドライブ、初めて聞く単語にすぐには理解出来ない。それにガンダムと戦闘とは何の事だろうか。

「ちょっと待ってください。俺は一体何をしていたんですか？ガンダムと戦っていたなんて・・・」

「意識が戻ってすぐだから状況が理解出来ないの？」

「多分そうだと思います。」

スメラギは真っ直ぐにバナージの瞳を見つめた。

張り詰めた空気が部屋に漂う。

「・・・いいわ、順を追って説明するわね。私達ソレスタルビーイングは連邦軍のアロウズと戦闘になった。アロウズのモビルスーツ部隊をソレスタルビーイングが所有するガンダムで撃退した所にバナージ君の乗っていた白い機体がコチラに攻撃を仕掛けてきたの。それを鹵獲してアナタはトレミー、この艦に居るって訳。理解してもらえたかしら？」

スメラギの説明を聞いても頭の中はまだ混乱したままだ。

むしろ悪くなったと言ってもいい。

また聞いた事のない単語が出てきた。

ソレスタルビーイング、アロウズ、どちらも今までに聞いたことも無ければ見た事も無い。

ただ連邦軍とガンダム、この二つはバナージもよく知っている。

「俺が戦っていたと言うガンダムってバンシイ、黒いガンダムですか？」

フル・フロンタルの搭乗するシナンジュを倒す為リディ少尉の乗る2号機であるガンダムバンシイと一緒に戦った。

バナージが知る限りガンダムはユニコーンとバンシイの2機しか無いはずだ。

しかし返ってきた答えは違っていた。

「いいえ、色は黒くは無いわ。アナタが戦闘したガンダムはどちらも白色よ。後、さっき言ったバンシイって一体何？」

バンシイの事を聞かれましたと焦る、だがバナージもバンシイについてはあまり情報が無い。

うまくごまかす方法もすぐには思いつかず正直に答える他無かった。「バンシイはユニコーンの2号機です。バンシイにもユニコーンと同じサイコフレームが搭載されています。それ以外は俺にも詳しくは分かりません。」

「ユニコーンって言うのはアナタの乗っていた白いモビルスーツの事？」

「そうです。」

「あとサイコフレームって言うていたわね。それは一体何なの？」

「サイコフレームはコンピューターチップを金属粒子レベルで鑄込んで作ったモビルスーツ用の構造部材と聞いています。でも作った人もサイコフレームに付いてはよく分かっていないって聞きました。」

「それじゃあアナタは何も知らずにあのモビルスーツに乗っていたの？」

「そう言う事になります。」

「・・・まあいいわ。アナタの機体はコチラでも解析していますから。それじゃあ次ね。あの機体は誰が作ったの？ガンダムと対等に戦ったあの性能は普通では考えられないわ。」

「ユニコーンは父から託されたんです。」

「お父さんから？」

「はい、それで略奪されるのを防ぐために俺の生体データを登録して。だからユニコーンは俺以外は動かせないようになっています。」

「それで、アナタのお父さんは何処でその機体を？」

「それも分かりません。ユニコーンがある事自体知らなかったんです。パイロットになったのだって・・・」

スメラギは話を聞いていてこの少年は敵ではない事はわかった。

だがこの少年もアノ白い機体、ユニコーンについては深くは知らないらしい。

これ以上尋問しても情報は出てこないと判断して席から立ち上がる。
「大体の事は分かったわ。でも、しばらくはこの艦に居てもらいます。」

「それは分かっています。」

「そう、それじゃあ質問はもう終わり。さっき居た部屋に戻ってもいいわ。」

スメラギはバナージを安心させようと優しく言うのと部屋の隅に立っているティエリアに近寄った。

「ティエリア、バナージ君を案内して上げて。もう扉のロックは掛けなくてもいいから。」

「彼を信用するのですか。」

「そこまでじゃないけど、私達に危害を加えるような事は無いわ。」

「アナタがそう言うのなら構いません。後は僕が案内します。」

「それじゃ、お願いね。」

ティエリアに後の事を任せるとスメラギは部屋から出て行った。

部屋に残ったバナージを見てティエリアも動く。

「いつまでそこに座っている。行くぞ。」

「はっはい！」

バナージは急いで立ち上がり部屋から出て行くティエリアに付いて行く。

先に進むティエリアに誘導されながら沙滋の居る部屋に向かい歩く。部屋に着くまでは終始無言だった。

「付いたぞ、この部屋だ。スメラギさんの指示で、もう部屋にロックは掛けない。中に居る沙滋・クロスロードにも伝えてくれ。」

「分かりました。」

「それと一つ聞きたい事がある。」

「何ですか？」

「お前は何者だ。」

「・・・どう言う事ですか。」

バナージの言う事には答えず真っ直ぐに睨むティエリア。

臆せずにはバナージもティエリアを見る。

すると鼻で笑いティエリアは背を向けて歩き出した。

「何でもない、気にするな。」

「・・・」

立ち去るティエリアを見るとバナージは沙滋の居る部屋に入った。

第十一話 謎を残して（前書き）

もうすこしでユニコーンが活躍する戦闘シーンに行けそうです。
しばしお待ちを。

第十一話 謎を残して

尋問が終わったバナージが沙滋の居る部屋に戻ってきた。

突然の事に戸惑っていた沙滋が無事に戻ってきたバナージを見て安堵する。

「よかった、なんとも無かったんだね。」

「少し質問されたぐらいですよ。」

「でも僕の時は何も無かったのにどうしてキミだけ？」

刹那の計らいで何もされる事なく保護されているが沙滋はその事を知らない。

それにバナージは所属不明のモビルスーツに乗りソレスタルビーイングに攻撃を仕掛けてきた。

その彼を沙滋と同じようにただ保護する訳には行かない。

その事を言うべきか躊躇するがいずれはわかる事だった。

「それは・・・それは、俺がモビルスーツに乗っていたから。」

バナージは正直に告白した、その事に驚きを隠せない沙滋はバナージの両肩を掴んだ。

「どうしてキミまでそんな事を？何で？罪の無い人が一杯死ぬんだぞ！」

「俺だって人殺しがしたくて乗っている訳じゃありません。でもユニコーンは父さんに託された最後の想いなんだ。」

「想い・・・その為にキミは戦っているのかい？」

「父さんのユニコーンには今までに出会った人達の想いが詰まっているんだ。オードリを守る為にも俺はユニコーンに乗る。」

「オードリーって人はキミの大切な人なのか？」

「そうです！」

バナージは自信を持って答えた。そんな彼を見て沙滋はルイスを思い出す。

4年前の時ルイスに何もしてやることが出来なかった。



アレルヤを救出する為に連邦軍の収容施設を襲撃した事は瞬く間に世界中に伝わった。

ガンダムが現れた事でソレスタルビーイングが復活した事を世に知らしめた。

連邦軍はソレスタルビーイングが再び武力介入を始めた事を逆手に取りアロウズの権限の拡大を謀った。

今世界中で報道されておりソレスタルビーイングも来るべき戦いに向けて準備を始める。

マリナ・イスマイルはその放送を見て母国であるアザディスタンの現状が気になっていた。

本当なら彼女が先頭に立ち国民を先導しなければならないが今はアロウズに狙われる身であった。

迂闊な行動をしては情勢が不安定なアザディスタンがさらに悪くなる。

「いったいどうしたら・・・」

不安になるマリナ、プトレマイオスに収容されてからその事ばかり考えていた。

すると部屋と扉が開いた、そこには刹那が立っていた。

「どうした？」

「刹那・・・そういえばまだ助けてくれたお礼を言ってなかったわね。本当にありがとう。」

「気にするな、指示に従ったまでだ。」

「そんな事は無いわ、それに5年前のアザディスタンの内紛を止めてもらった事も本当に感謝しているわ。戦いをせずに内紛を止めた、あの行為はとても素晴らしい物だと私は感じます。」

マリナの言葉を聞いても刹那は無表情のままだ。

そんな彼をマリナは優しく見ていた。

「そんな事はいい、これからどうするつもりだ。」

「アザディスタンに戻ります。」

「駄目だ、保安局が来る。それにマリナを口実に連邦が介入してくる可能性もある。」

「連邦に加盟しなかったアザディスタンは世界から見放され経済も破綻している、国民は飢えに苦しみ、改革派との争いも泥沼と化している。でも、だからこそ私は・・・」

「マリナの考えている事も理解している。でも艦の進路を変える事は出来ない。」

「そう・・・ごめんなさい、無理を言ってしまった。」

刹那に否定され落胆するマリナ、そんな彼女を見ても刹那の表情は変わらない。

マリナを一人残し部屋を後にしようと歩き出す。

だが扉を開けて出て行こうとした所で歩みを止めマリナに振り返った。

「トレミーはこのまま反政府組織カタロンの基地に行く。降りる準備をしておけ。」

「何で私まで・・・」

「お前に会いたがっている人がいる。」

そう言うのと部屋から出て行った。

閉じられた部屋の中で自分の元を去っていったかつての親友を思い出す。

今まで不安や心配事しか頭の中に無かったのが一筋の光が見え始めた。

プトレマイオスはカタロンの基地を目指し敵に見つからぬよう海中を進んでいく。

第十一話 謎を残して（後書き）

アドバイス、感想お待ちしております。

第十二話 それぞれの想い（前書き）

すみません、次回こそユニコーンの戦闘シーンを書きたいと思います。

第十二話 それぞれの想い

ルブアルハリ砂漠、ここに反政府組織カタロンの基地がある。

砂漠に地下道を作り3年あまりの歳月をかけ基地と言えるまで大きくした。

通常なら連邦軍が見逃すはずは無いがGN粒子散布装置のおかげで見つからないで居た。

連邦軍が非加盟国に対する経済活動を麻痺させるために設置されているこの装置で今まで連邦に見つからずに来れた。

そこへプロトレマイオスは向かっている。

砂漠には大量のGN粒子が散布されており敵機の反応をレーダーで捕らえる事は出来ない。

その為発見される可能性は低くなるが敵の奇襲がないとも限らない。スメラギはプロトレマイオスの光学迷彩展開機能を使い砂漠の砂の中に艦を隠しガンダム2機と輸送艦で基地に行くことにした。

輸送艦にはスメラギ、マリナ、沙滋、刹那の四人が搭乗しケルディムとセラヴィーが小型船の防衛に付いた。

「こんな所に敵なんて来るのかよ？」

「GN粒子が散布されているとはいえ油断は出来ない。気を緩めるな。」

「はい、はい、わかりました。」

ロックオンの言う様にあたりは砂漠しかなくとても敵が来るように思えなかった。

レーダーも何一つ反応が無い。

それでも敵が100パーセント来ないとは言切れない。

もしもここで取り逃がし増援を呼べたらカタロンの基地やプロトレマイオスが危機に陥る事となる。

それは何としても阻止しなければならない。

ティエリアは全方位に集中し前に進んでいると砂漠の一角にソレら

しき物が見えてきた。

巨大なシェルターを砂で覆っているが間違いない基地だった。

「スメラギさん、カタロンの基地を発見しました。」

「わかったわ、こちらでコンタクトを取ります。敵機の反応が無い
か再度確かめて。」

「了解。」

ティエリアは通信を切るとより一層警戒を強めた。

ケルデймもGNスナイパーライフルを構えて輸送艦の防衛に付く。
スメラギは暗号通信でカタロンに呼びかけた。

しばらくすると基地のシェルターがゆっくりと開放されていく。

「聞こえるか？そちらを確認した。シェルターを開ける。」

カタロンからの通信が入りガンダム2機と輸送艦をシェルターの内
部に移動する。

シェルターはまたすぐに閉じられた。

基地の内部は旧式のモビルスーツが10機以上並んでいた。

ガンダムと輸送艦も余裕で入りきる程内部を広がった。

「これがガンダム！」

「アザディスタンを救ってくれた英雄の機体だ。」

ガンダムを見るとカタロンの構成員が迎え入れてくれた。

皆ガンダムに目が惹かれており作業を止め写真まで撮りだす者も居
た。

輸送艦とガンダム2機が着地し乗組員とパイロットが降りてくる。

ティエリアとロックオン、パイロットスーツにヘルメットを被って
おり顔は見えない。

するとカタロンの構成員が次々と二人に集まってきた。

「よく来てくれた、ソレスタルビーイング！」

「歓迎するよ！」

「顔は見せてくれないのか？」

ティエリアはいつもと変わらず冷静に対処する。

「我々には秘匿義務がある。悪いがそれは出来ない。」

「そんな硬い事言うなよ。いいじゃねえかそれぐらい。」
そう言うとロックオンはヘルメットを脱ぎ顔をさらした。
その行動にティエリアは慌てる。

「キサマは何を!？」

「アレルヤを助けるとき助太刀してもらっただろ？」

ティエリアはロックオンを睨み付けた。

だが諦めて輸送艦のスメラギ達を迎えに背を向けて歩き始めた。

カタロンのクラウドス・グラウドとソレスタルビーイングは今後の行動についての会談をする為に集まった。

それと一緒にマリナと沙滋の保護も頼むつもりだ。

これからの戦闘は熾烈を極める事になる。

戦闘員でない二人をこのまま置いておくにはあまりに危険だった。

「会談に応じてくれて感謝します。クラウドと言います。」

「

「申し訳ありませんが自己紹介は・・・」

「事情は承知しております。」

「マリナ姫を助けていただきありがとうございます。以後は我々が責任を持って保護させていただきます。」

会談の間にはかつてのマリナの側近であるシーリン・バフティヤールも居た。

「シーリン・・・」

マリナは彼女もまた戦闘に参加して戦っている事に戸惑いを隠せない。

「ソレスタルビーイングに居たいの？」

「アナタこそ反政府組織に・・・」

「いけない事？」

その言葉に言い返すことが出来ないマリナ、自分が国を指導出来なかったばかりに彼女を戦いへと誘ってしまった。

今のアザディスタンの情勢が悪いのも私がしっかりできていれば・・・

・
そんな私に国の為に戦っているシーリンをとにかく言う事は出来ない。

「もう一人保護を頼みたい。沙滋クロスロード、民間人だ。いわれなくアロウズにカタロンの構成員の疑いを掛けられている。」

「ちょっと勝手に!？」

ここでやっと自分がなんでココに連れてこられたのかが分かった。ソレスタルビーイングには居たくない、けれどもカタロンだって戦いを引き起こす存在としては変わりない。そんなところに沙滋は居たくはなかった。

「そうするのが一番よ、沙滋君。」

スメラギはそんな彼を強引に引き取らせた。

これ以上は民間人の彼にも被害が及ぶとスメラギも思っていた。

「そろそろ本題に入ろう、我々カタロンは現政権打倒の為・・・」

「申し訳ありませんが私達は政治的思想で行動しているわけではございません。」

「ですがソレスタルビーイングは連邦と対立している。」

「私達の敵は連邦政府ではなくアロウズです。」

「政府直轄の独立部隊を叩く事は我々の目的と一致するのではないですか？アロウズの悪行を征するため共に手を取り合い・・・」

「残念ですがここにあるモビルスーツではGNドライブ搭載型のモビルスーツには太刀打ち出来ません。」

「だとしても我々はアナタ達に協力したい。補給や整備だけでも力になりたいのです。」

「ありがたい申し出ですがそれも出来ません。こちらの情報を外に漏らすわけにはいきませんので。」

「そうですか・・・分かりました。」

「ですが私達も出来る限りの事はします。」

「その言葉を聞けただけでもうれしいです。」

クラウドとスメラギは互いに握手を交わし今回の会談は終了した。



会談が終わりクラウドとシーリンは別室に移った。

シーリンはソレスタルビーイングを取り込めなかった事に落胆していた。

「やはり無理だったわね。」

「いや、あの言葉を聞いただけで十分だ。これからのアロウズとの戦いは熾烈を極めるだろう。近い将来我々と手を取り合う日も来るだろう。そうだろうか？ ジーン１」

クラウドが見た先にはガンダムマイスターであるはずのロックオン・ストラトスが居た。

「さあ、どうですかね。」

カтарンの構成員であるライル・ディランディはソレスタルビーイングの情報を漏洩しようとガンダムマイスターの誘いに乗ったが未だに何も掴めないで居た。

「ただ、敵ではない事とガンダムの性能は凄まじく高い。それだけは確かです。もう戻りますよ、あんまり長くココに居たんじゃ怪しまれる。」

そう言うときライルは部屋から出て行った。

ガンダムと輸送艦に戻ったメンバーはプトレマイオスに戻るべく準備を始める。

その中で刹那はスメラギと話していた。

「一つ頼みたい事がある。この艦を貸してくれ。」

「どうするつもり？」

「マリナをアザディスタンに連れて行く。」

刹那は以前にマリナに頼まれた事を覚えていた。

ガンダムやプトレマイオスが公の場にさらされるのは避けなければならずこの前は聞いてやる事が出来なかった。

腕を組みどうするかを考えるスメラギ、この輸送艦ならもしも発見されてもアザディスタンに危害はないだろう。

「分かったわ、私はガンダムで先にトレミーに戻っているわね。他のみんなにも私から言っておく。」

「了解した。」

それを聞くと刹那はマリナを連れて輸送艦でアザディスタンに向かう。

スメラギはガンダムでプトレマイオスに戻る。

基地のシェルターが開きガンダム2機と輸送艦が飛んでいった。

「マリナ・・・何処に行ったのかしら？」

シーリンは保護されたはずのマリナを探していた。

クラウドと話している間に何処かへ行ってしまう姿が見えない。

てっきり子供達の相手をしてきているものだと思っていたのだが・

・

マリナを見なかったか、と、しらみつぶしに聞いて回っていた。

それでも足取りはつかめないで居た。

この閉鎖された空間で見つからない訳がない。

だとすると・・・

「まさか・・・ソレスタルビーイングに!？」

だがガンダムと輸送艦はすでに基地から出て行った後だった。

「マリナ・・・」

沙滋はカタロンに居るつもりは無かった。

砂漠を抜けた先には町がある。

何とかしてそこまで行きたかった。

モビルスーツの置いてある格納庫で何か使えそうな物はないか探していた。

「おい！そこで何をしている！」

後ろから銃を構えたカタロンの構成員がコチラに向かってきた。どうする事も出来ずただ震えて立ち尽くすしかなかった。

「お前はソレスタルビーイングの・・・？」

どうやら自分はソレスタルビーイングのメンバーだと思われるらしい。

本当は違うと言いたい所だが今はそれを利用させてもらおう。

「ま、町に仲間が居て・・・」

「そうか、なら車を使え。」

そう言ってその人は車のキーを放り投げてきた。

「ありがとうございます。」

キーを受け取ると苦笑いしながら沙滋は車の元へ走っていた。しばらく走ると車が置いてある場所に着いた。

乗り込むとキーを差込みエンジンを駆けた。

助手席の座席には砂避けのローブも置いてある。

ローブをまとうと車を発進させる。

「コイツで超えられるかな？」

沙滋は一人で砂漠を越えようと走り出した。

幸いにも誰にも止められずに砂漠まで来れた。

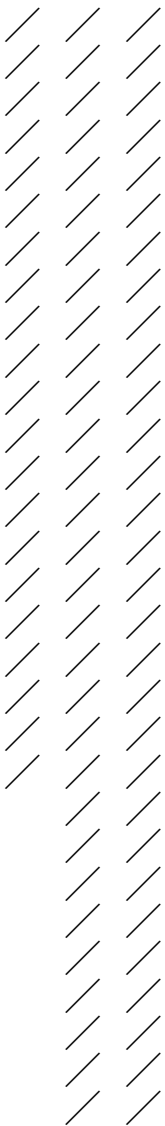
車は砂漠でも走れるようにチューニングされており問題なく砂の上を進む事が出来た。

「このまま進めば・・・」

大きな砂山を越えると突然ブレーキを踏み車を止めた。

「アレは・・・連邦軍！？」

そこには連邦軍の軍艦が空を飛んでいた。



沙滋の居なくなった部屋でバナージは一人コンピュータの画面に向き合っていた。

今の自分に置かれた状況が少しずつ理解してきた。

「アロウズ、まるで授業で聞いたティターンズじゃないか。」

どんな手段を使ってでも敵である者は排除する、昔連邦軍がジオンに対して行った政策と似ている。

やはり人は変わる事は出来ないのだろうか？

「！？これは・・・敵意が近づいてくる。」

バナージは立ち上がるとユニコーンの置いてある格納庫まで走った。

「急がないと。」

艦の構造はさっき見ていたコンピュータに載っていた。

真っ直ぐに格納庫のユニコーンまで来るとパイロットスーツも着ずにコクピットに乗り込もうとする。

だがガンダムを整備をしていたイアンに気付かれてしまう。

「何をしているんだ！」

整備を中断しバナージのユニコーンに向かって来る。

「敵が来ます！急がないと取り返しのない事になる。」

「敵だって？そんな情報は・・・」

「レーダーに敵機の反応、カタロンに基地に向かっています。」

するとフェルトの通信が艦内に響き渡った。

「行かせて下さい。俺はアナタ達の敵じゃありません！」

このままではカタロンの基地はアロウズの襲撃は免れることは出来ない。

少しでも早く救援に向かわなければならない。

スメラギはまだ戻っておらずガンダムもアリオスとこのユニコーンしかない。

「・・・分かった。」

「本当ですか！？」

「ただし完全に信用した訳じゃない。すぐにアリオスも向かわせる。それまでの間だけだ。」

「分かりました、ユニコーンで出ます！」

バナージはコクピットに乗り込みハッチを閉じた。

ディスプレイに右手をかざし生体反応を読み取らせた。

エンジンが起動し全天周囲モニターが周囲を映し出す。

イアンもユニコーンの発進準備を進める。

「今頼れるのはアレルヤとアイツだけだ。頼んだぞ。」

ユニコーンの足を固定しているカタパルトが動き出す。

移動されたユニコーン、プトレマイオスのハッチが解放し外から光りが差し込む。

「場所はすぐにデータを送る。方角はここから北北西だ。」

「了解、ユニコーンガンダム出ます！」

カタパルトが動きだし体にGが掛かる。

ランドセルのバーニアを吹かしカタパルトを切り離すとユニコーンは飛び立った。

第十二話 それぞれの想い（後書き）

感想、アドバイス等お待ちしております。

第十三話 戦う理由（前書き）

やっと久々のユニコーンの登場です！
でも戦闘は少ないです。スミマセン。
戦闘シーンは書くのが苦手なのでアドバイスをいただけるとうれ
しいです。

第十三話 戦う理由

「あんな軽装で何で砂漠を走っていた！」

「っ!？」

連邦軍に掴まった沙滋は厳しい尋問を受けていた。

兵の怒鳴り声にただ口を閉ざす事しか出来ない。

「どうしても言わない気か？まあいい。もうすぐ生体認証の解析も終わる。化けの皮が剥がれるのも時間の問題だぞ。」

「……」

民間人の沙滋に軍の尋問に耐える精神力はない。

ただ下を向いて時が過ぎるのを待っしか出来る事は無かった。すると部屋の扉が開きもう一人連邦軍の兵士が入ってきた。

「バイオメトリクスがヒットした！そいつはカタロンの構成員だ！」

「やはりそうか！」

「違う！僕は……」

僕はカタロンの構成員なんかじゃない、そう言いたかった。

だが連邦兵は問答無用で沙滋の顔面を殴りつける。

「そんなウソが通用するわけないだろ！」

「違う……」

殴られた所がヒリヒリと痛む。

カタロンの構成員の容疑を掛けられてしまった以上尋問はさらに過激さを増すだろう。

情報を聞き出すまでは殴るくらい当たり前、でも沙滋はカタロンの情報なんて何も知らない。

そう訴えかけても聞いてくれる事は無いだろう。

沙滋はこれから起こる事に恐怖した。

「手荒な真似は止せ！」

声のする方を振り向くとまた別の兵が来ていた。

尋問していた二人が姿勢を正し敬礼をする。

どれもフラッグやティエレンばかりで今のモビルスーツにとっても太刀打ち出来ない。

アヘッドに向かいレールガンを発射するがどれだけ撃っても簡単に避けられてしまう。

「そんな旧型のモビルスーツで・・・」

この作戦に参加しているソーマ・ピーリスは悲痛な気持ちで居た。相手との戦力差は歴然としている。

わざわざ殲滅作戦などしなくてもよいのではないのか？

いくら上層部からの命令とは言え納得が出来ないで居た。

そうしている間にも次々とカタロンのモビルスーツが破壊されていく。

「これより掃討作戦に入る。オートマトン射出準備。」

部隊長のアヘッドがキルモードに設定されているオートマトンを内蔵部へ射出しようとする。

「そんな！？待って・・・！」

その行動にピーリスは驚いた。

無抵抗の人間までも容赦なく殺すアロウズの本質がやっと分かった。しかし彼女にそれを止める術は無かった。

無常にもオートマトンは射出されようとしていた。

「ん！？新たな敵影を確認、こちらに向かってきます。」

部隊長が部下の報告を受けて振り向く、そこには白亜の機体が飛んでいた。

「遅かった・・・」

バナージが見つめる先には無残に破壊されたモビルスーツが横たわっていた。

見るからに戦力差は圧倒的にカタロンの不利だ。

それでもまだ懸命に戦っているモビルスーツが数機残っている。

これ以上被害を大きくさせないためにも赤い粒子を出しているモビルスーツに接近する。

ユニコーンに気付いた敵機がビームライフルを撃ってくる。
左腕のシールドをX字にスライドさせ機体の前方に構える。
シールドのＩフィールド発生装置が飛んで来るビームを弾く。
ユニコーンには頭部のバルカンしか射撃武器は無い。ためビームサーベルで斬りかかるしかない。
シールドでビームを防ぎながらアヘッドに迫る。
接近するユニコーンにアヘッドはビームライフルの攻撃を止めサーベルに持ち替える。

「来る・・・！」

右手にビームサーベルを握ったアヘッドが接近戦を仕掛けてくる。
バナージも左腕のビームサーベルを引き抜き鏢迫り合いに持ち込む
と目の前に居るアヘッドの頭部にバルカンを発射する。
弾は頭部に命中しモニターが割れ装甲が凹む。

さらに左腕のシールドを横になぎ払い頭部を吹き飛ばすとアヘッドは地上の砂漠へと落下していった。

落下していくモビルスーツに戦闘能力が無いのを見ると次の標的に向かう。

「これ以上はやらせない！」

敵のモビルスーツ部隊にバナージは飛び込んでいく。

アロウズは突然現れた謎のモビルスーツに困惑していた。

こちらが戸惑っている間にすでに1機落とされてしまっている。

「隊長、アレは・・・？」

「分らん、データに該当する機体はない。だが今回の作戦はカタロンの基地の殲滅だ。ピーリス中尉！」

「・・・」

「中尉！」

「！？っはい・・・」

ピーリスは敵であるはずの白亜の機体に引かれていた。

まるで心の中を覗かれているような、でも不思議と嫌悪感は無かった。

むしろ暖かくて安らぎを感じていた。

「白いヤツは中尉に任せる。その間にオートマトンを基地に射出する、分かったな！」

「了解！」

部隊長の命令を聞くとピーリスは単機でユニコーンの撃墜に行く。

ピーリスのアヘッドにバナージもすぐに気付いた。

「手ごわいのが来る。でもここで時間は掛けられない。」

ピーリス以外の機体は尚も基地への攻撃を止めようとはしない。

これ以上被害を拡大させる訳にはいかない。

アヘッドを視界に捕らえるとバルカンで威嚇をする。

弾は簡単に避けられてしまいユニコーンにビームライフルのビームが飛んで来る。

バナージもコレを回避しビームサーベルで斬りかかろうとするが。

「敵意を感じられない。どう言う事だ？」

敵意の感じる事の出来ない相手にバナージは戸惑う。

だがそのまま右手のビームサーベルを振りかぶる。

アヘッドは軽くスラスターを吹かし横へ回避するがその隙にユニコーンはアヘッドを掻い潜り基地へ向かって行く。

「しまった!？」

機体を反転させビームライフルで背を向けて飛んでいるユニコーンを狙い撃つ。

しかしユニコーンは背中に目が付いてるかのようにビームを避けていく。

ついには射程外へと距離を開けられてしまう。

「何をやっているのだ・・・私は・・・私は超兵なのに・・・!」

右腕を側面の戦闘画面に打ち付けると自分の不甲斐無さを悔やんだ。ピーリスは敵を撃ち損じた悔しさもある一方、この掃討作戦を止めてくれるのではないかと、ユニコーンに微かな希望を抱いた。

第十三話 戦う理由（後書き）

アドバイス、感想等お待ちしております。

第十四話 燃えるアザディスタン（前書き）

バナージとマイスターの絡みが少ないです。
次回でちゃんと出来る様に話を進めていきます。

第十四話 燃えるアザディスタン

ピーリスのアヘッドを後にしバナージは基地へ向かった本体を追う。だが時はすでに遅く隊長機がオートマトンを基地内部に向け放っていた。

地上へ落下していくオートマトンを見て直感的に感じる。

「アレはダメだ！急いで止めないと！」

戦闘画面に小さく映っているだけでも関わらずバナージはオートマトンの本質を瞬時に感じ取る。

オートマトンは人間を殲滅対象として設定されている。

基地内部で活動を開始したら瞬く間に血の海となるだろう。

ユニコーンはバーニアを噴かして地上へ降下する。

起動したオートマトンを狙いバルカンを撃ちまくる。

弾に直撃したオートマトンは跡形も無く破壊される。

だが数が多かった、ユニコーン1機のバルカンだけでは数が減っていかない。

さらには上空からアヘッドのビーム攻撃がユニコーンを狙う。

「これだけの数、一人じゃ無理だ。殺気！？」

アヘッドからの攻撃を敵意を感じ取りながら回避していく。

敵意を感じ取る事で相手より一瞬でも早く動く事が出来る。

さらにシールドのIフィールド発生装置でビームは全て無効化される。

「何でコレだけの数のビームを避け切れるんだ！？」

「あのシールド、ビームを弾いてる！？」

数で圧倒しているにも関わらずユニコーンを落とす事が出来ない事に次第に焦りが見え始める。

ユニコーンの性能とバナージの戦闘能力で敵からの被弾は未だにゼロだがオートマトンへの攻撃が出来ないで居た。

「このままじゃ・・・」

ビームをシールドで防ぎながら横目で全天周囲モニターの後方を見る。

そこには起動したオートマトンが4本の足を砂の上で器用に動かし基地へ入っていった。

「ダメなのか！」

自分一人では何も出来ない現状がバナージは悔しかった。

それにこのまま数で押されてはユニコーンでも持たないかもしれない。

「アレを使う。それしか！」

NT-Dの使用を覚悟した、パイロットである自分をNT-Dに認知させガンダムに変身する。

バナージはもうそれしかないと考えた。

ユニコーンの装甲の隙間からピンク色の光りが漏れ出す。するとアヘッドの1機がビームに貫かれ爆発した。

「何だ！？・・・援軍？」

レーダーにソレスタルビーイングのガンダムが3機こちらに向かってきていた。

その内の1機、ケルディムガンダムがGNスナイパーライフルで敵機を狙撃した。

「無事か？」

「アナタは・・・？」

「モビルスーツは俺達が食い止める、内部を頼む。」

「分かった。」

ソレスタルビーイングのガンダムから通信が入ってきた。

援護が来てくれた、これならNT-Dを使わなくても出来る。

通信画面に映る緑色のスーツを着たパイロット、ロックオンを信じてアヘッドに背を向けて基地に侵入する。

「敵の増援を確認、ソレスタルビーイングです！」

「各機ガンダムと応戦しろ。」

隊長機の指示で固まっていた部隊がそれぞれ展開していく。

「彼に任せて大丈夫なの？」

「今はあの機体が基地から一番近い。信用するしかない。」

アレルヤは突然プロトレマイオスから出撃したバナージをすぐには信用出来ないで居た。

身元不明、何処で作られたのかも分からないモビルスーツ、疑うには充分だ。

「それよりも今はコイツ等を何とかするのが先だ！」

ロックオンが二人の会話に割って入る。

アロウズの卑劣な作戦で仲間が殺されようとしている。

そんな事を黙って見ている訳には行かない。

「アロウズ、許さねえ・・・許すもんか！！」

ロックオンはGNスナイパーライフルを腰にマウントさせGNピストルに持ち替える。

両手にGNピストルを持つとアヘッドに凄まじい速さで連射する。

「逃げんじゃねえ！」

回避行動を取るアヘッド、だが連射されるGNピストルのビームに飲み込まれてしまう。

たちまち装甲は貫かれGNドライブが破壊される。

「高濃度圧縮粒子開放。」

ティエリアはセラヴィーのGNバズーカを連結させ機体前方に構える。

GNドライブからエネルギーがチャージされる。

「ダブルバズーカ、バーストモード！」

丸いビームの塊がアヘッドに目掛けて発射する。

シールドを構えて防御姿勢を取るがビームは機体を飲み込み爆発する。

「無人兵器による虐殺行為、自ら引き金を引こうともしないなんて！」

アレルヤのアリオスは変形すると敵モビルスーツに一気に接近する。モビルアーマーの加速性能に敵は反応する事が出来ないで居た。

ビームライフルを構えてビームを発射する。

アリオスをロックする事は出来ないがやらないよりはマシだ。

4機がかりでビームライフルを撃つ。

だがそんな攻撃に当たるアレルヤデでは無い。

ノーズユニットを展開し胴体を挟み込む。

「罪の意識すら持つ気は無いのか！」

胴体を挟まれたアヘッドはそのまま半分に切断され爆発した。

ガンダム3機の介入により基地の掃討作戦はこれ以上の進行は無理だ。

破壊されていくモビルスーツを見て状況は不利と判断した隊長機は撤退命令を下す。

「初期目標は完遂した、撤退する！」

ガンダムの迎撃から免れた機体が上空へ離脱して行く。

逃げるアロウズにロックオンの悲痛な叫びがこだまする。

見えなくなっていく機体に一心不乱にビームを撃ちまくる。

「逃げんなよお、逃げんなよアロウズ!!!!」

内部へと侵入したバナージ、そこには悲惨な現状が待ち構えていた。起動したオートマトンのマシンガンが武装したカタロンの構成員を撃ち殺していた。

あたりには血が飛び交い動けなくなった人をオートマトンの足が無残にも踏み砕く。

必死になって手持ちの武器で応戦するが硬い装甲を撃ち抜く事は出来ないうで居た。

「酷い・・・こんな・・・」

これではダカールの戦いと同じ、いや、それ以上に酷かった。

アロウズは上層部の命令に従っているだけ。

それに主義や思想などは無い。

ジンネマンと一緒に戦った袖つきのメンバーとは違う。

「下がってください！ユニコーンで破壊します。」

通信で構成員に呼びかける。

だがバナージの言う事を聞く者は居なかった。

それどころかユニコーンに銃を向ける人も居た。

「違う、俺は敵じゃありません。あなた達の味方だ！」

必死に呼びかけるが恐怖に錯乱する人々には通じなかった。

勝てるはずも無いオートマトンと戦いまた一人と死んでいく。

「!? 避けてくれよっ！」

バナージは頭部のバルカンでオートマトンを器用に撃っていく。

しかしバルカンでは威力が強すぎて破壊の衝撃で地面がぐぐれ壊れたパーツが周囲に飛び散る。

それでも少しづつ数が減っていく、バナージがいち早く気配を察知して動いた事によりカタロンの被害は想定よりも少なく済んだ。

最後のオートマトンがユニコーンにマシンガン撃ってくるがモビルスーツの装甲には効かない。

ユニコーンの足でソレを踏み潰すと戦闘は終わった。

「終わった・・・でも。」

それでも人的被害は少なからず出たし今回の掃討作戦で基地の場所がばれてしまった。

内部はモビルスーツとオートマトンの攻撃でボロボロに破壊されており復旧には時間が掛かる。

血で汚れた基地を見てユニコーンはプトレマイオスに帰艦する為ガンダムに続く。

沙滋はスミルフ大佐の計らいで逃がしてもらえた。

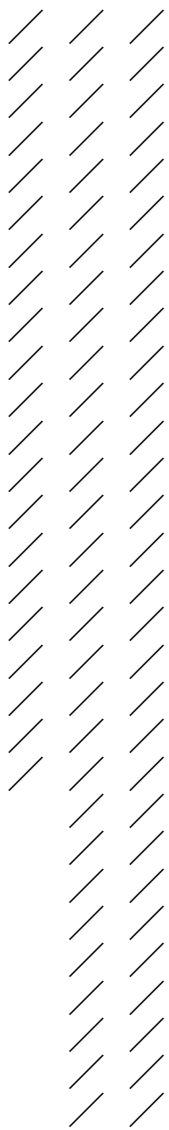
だがカタロンの基地を目指しアロウズが動いている事を聞かされた。乗ってきた車に乗り方位磁石で位置を確かめながら基地に車を走らせた。

その途中で見覚えのある光りが空を飛んでいくのを見る。

「アレは!？」

擬似GNドライブの赤い粒子が空に舞ってた。

車のアクセルを踏みスピードを上げる、だが基地に到着するには20分以上掛かってしまう。
それでも沙滋は急いだ。



小型輸送船でアザディスタンへ向かった刹那とマリナ。

刹那は上空の雲に隠れながら敵に発見されないように小型輸送船を操縦し進んでいく。

「もうすぐアザディスタンに着く。」

レーダーで現在地を確認する刹那、もうすぐ故郷であるアザディスタンの国境を渡る。

だが雲を抜けたその先には炎に包まれる町だった。

「アザディスタンが燃えている・・・どうして・・・どうして・・・」

その光景を見てマリナは絶望する。

せっかくここまで来たのに、結局何も出来ないなんて・・・

「これだけの破壊規模、テロではない。」

状況把握の為空域をレーダーで探索する。

そこに赤いモビルスーツが居た。

「あのモビルスーツ!? まさか・・・!」

それはアルケーガンダム、因縁の相手アリアル・サーチェス。

「そうよ、そのまさかよ!」

「くっ!? 現空域を離脱する。」

「刹那、でもアザディスタンが・・・」

「この機体では無理だ、捕捉される前に離脱する。」

小型輸送船を方向転換し全速力でアザディスタンから離れていく。

燃えるアザデイスタンが視界から遠ざかっていく。
マリナは涙ながらに見つめた。

第十四話 燃えるアザディスタン（後書き）

コメントお待ちしております。

第十五話 傷跡（前書き）

いつも見ていただきありがとうございます。

懸命な人はご存知だと思いますがユニコーンには武器がビームサーベルとバルカンしかありません。

そこでこの武器を使って欲しいなどリクエストが有りましたらコメントに書き込んでください。

本編で使いたいと思います。

でもサテライトキャノンとかは無理ですのであしからず。

第十五話 傷跡

「そんな・・・」

戦闘の終わった後の基地は燦々としていた。

負傷した人の治療、脱出する為の物資の搬送に皆必死に動いていた。壁は崩れあたり一面に血が飛散している現場を見て沙滋は恐怖する。崩れた瓦礫からまた一人、死体が運び出されていく。

「負傷兵はこっちへ運んでくれ。」

「ライトの向きを替えろ、敵に見つかる！」

もはや原型を保っていない人の亡骸、漂う葉莢の匂い、これが戦争だということか・・・

僕が連邦軍に話さなかったらこうはならなかったのか・・・自分のせいで人が死んでいくと言う現実を沙滋は認識できないで居た。

カタロンの防衛に駆けつけたソレスタルビーイングのガンダムマイスター3人とユニコーンのパイロットであるバナージも見るも無残な姿となった現場を目の当たりにしていた。

「無抵抗な人まで殺すなんて、こんなの！」

かつて地球連邦軍とジオン残党の袖つきを行き来している時にもこのような現場は幾度も見てきた。

ビーム兵器の攻撃で髪の毛一本として残らず死んでいく人も居た。

何度見てもこの光景は辛かった。

たとえ世界が変わろうとも人は戦う事を止める事が出来ない。

そして悲劇と言う名の連鎖がいつまでも続く。

もうこれ以上悲しい想いをする人を増やしてはいけない。

「そうだよ、オードリー。」

すると援護に来てくれたソレスタルビーイングのガンダムから通信が入った。

「機体は無事か？」

「アナタは？」

「俺はロックオン・ストラトス。ケルディムガンダムガンダムマスターだ。」

「ガンダムマスター？」

「今回の事は礼を言う。お前のお陰で被害が少なくすんだ。」

「俺はそんな・・・ただ、今の自分出来る事をしただけです。」

「それでもさ、他のメンバーも紹介する。コクピットから降りて来い。」

ロックオンはそう言うのと通信を切った。

画面からロックオンの顔が消えるとセンターコンソールを操作する。ロックが解除されるとユニコーンのコクピットが開放され外の空気が入ってくる。

葉莢の匂いが充満しており破壊された壁などから砂埃が舞って息苦しかった。

バナージはコクピットから身を乗り出すとアンカーに足を掛けてゆっくりと下へ降りていく。

床へ足をつけるとロックオンと残りの2人のマスターが近づいてきた。

「パイロットスーツも着てないのか？」

「ロックオン・・・さん」

「さん、なんて付けなくていいよ。」

「キミがああ白いモビルスーツを操縦していたのかい？」

ロックオンに続きアレルヤがバナージに話しかかる。

だがバナージはプトレマイオスの乗組員をまだ全員覚えていない。初対面のアレルヤに戸惑っていた。

「ああ、そういえば初めて会ったね。僕はアレルヤ・ハプティズム、アリオスのガンダムマスターだ。もう1人は・・・」

「知っています、ティエリアさんですよ。」

「って、知ってたのか。」

「はい、意識が戻ってすぐに会いました。」

「なら説明しなくてもいいね。」

アレルヤは心なしかすこし残念そうだった。

話が終わるとティエリアがバナージに詰め寄ってきた。

「キミにどうしても聞かなければならない事がある。」

「……」

高圧的に話すティエリアにバナージは臆せず話しを聞いた。

真っ直ぐにティエリアを見る。

「キミはどうしてアロウズの襲撃が分かったんだ。」

「それは……」

「出撃前にイアンから聞いた。トレミーがアロウズのモビルスーツを索敵するよりも前に彼は敵の存在に気付いていた。これは一体どうゆう事なのか説明してもらおう。」

それは自分がニュータイプだから、などと言っても信じてくれる訳がない。

それに彼らにはニュータイプと言う概念など持ち合わせていない。説明した所で理解など出来ないし、バナージ自身ニュータイプが何なのかはつきりと分かっていない。

何故いち早く敵を見つけたのか、バナージはそれを説明する事が出来ない。

「まあいいじゃねえか、そんな細かい事。コイツが来なけりや被害はもつと広がっていたんだ。」

「だが、それとコレとは……!」

「少なくとも敵じゃないんだ、信じるよ。」

「っ!? ……分かった、だがいずれは説明してもらうぞ。」

ロックオンが宥めるとティエリアはその場を立ち去った。

歩いて行くティエリアの背中を3人は見つめていた。

「悪い人じゃないんだ、ただ任務に忠実すぎると言うか。」

「アレルヤさん……」

「これ以上ココにいてもしょうがない。トレミーへ戻るぞ、えー」と

「バナージ・リンクスです。」

「オーライ、アレルヤも行くぞ。」

「わかったよ。」

3人はそれぞれのモビルスーツへ向かう。

バナージはもう一度ユニコーンの所まで来るとアンカーに足を掛けて上昇する。

コクピットに乗り込みシートに座るとセンターコンソールに右手をかざして生体反応を読み取らせる。

3人から離れたティエリアは何故アロウズに情報が流れたのかを考えていた。

外部に情報が漏れるようなミスはしていない。

ならばどうして、内密者が居るのか？

すると基地の隅で立ちすくんでいる沙滋を見つけた。

「そんな・・・僕は・・・」

悲惨な現場を見て震えているのもあるだろうが様子が少しおかしかった。

それに攻撃を受けたのだからシエルターに非難しているはずなのにココに居る。

そんな沙滋に近寄ると肩を掴んだ。

「どうした、何故ココに居る？」

「ぼ・・・僕は・・・」

「話は後で聞く。ガンダムでトレミーへ戻るぞ。」

そう言うのと沙滋を引き連れてセラヴィーに向かう。

第十五話 傷跡（後書き）

感想をお待ちしております。

第十六話 晴れない疑惑（前書き）

沢山のコメントありがとうございます。

戦闘シーンはまたしばらく先ですが、その時には新しくユニコーンに武器を持たせたいと思います。

第十六話 晴れない疑惑

プトレマイオスへと帰還するガンダム、ティエリアはハッチを開け沙滋と共にコクピットから降りる。

ティエリアは無言で沙滋を人の居ない場所へと連れて行く。

何も言わないティエリアに沙滋もまた無言で付いて行くしかなかった。

通路の一角に付くと立ち止まり互いに向き合った。

「何をした。」

「ぼ・・・僕は・・・」

「したんだな、誰だキミは？アロウズのスパイか？」

「ちっ違う！僕は・・・！」

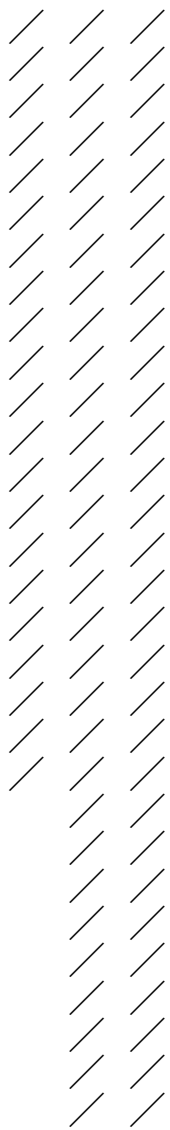
「訳を話してもらうぞ、沙滋クロスロード。」

もうこれ以上黙っている事は出来なかった。

鋭く見つめるティエリアの目線が痛かった。

取りかえしの付かないことをしたことはこれ以上ない程に分かっている。

沙滋はこれまでに起きたすべてのいきさつを話した。



プトレマイオスは光学迷彩を展開し砂漠の景色と同化し姿を隠している。

カタロンが脱出の準備が整うまではここで基地を防衛するつもりだ。ブリッジにいるイアン、スメラギ、バナージはスクリーンに映し出されている基地内部の様子を見ていた。

先ほどのアロウズの掃討作戦で死んでいった人が黒いシートに隠さ

れていく。

「これがアロウズのやり方なんですか？」

「そうよ、アロウズは治安維持を掲げているけど実態は今見ているとおり。反抗する者は容赦なく平和と言う名目のもと排除されるわ。」

「こんな事が平和に繋がる訳ありません。こんなの間違ってる。」

「バナージ君の言うとおりよ、そして地球連邦に加盟しない国は弾圧を受けるわ。こんな事が許される訳がないわ。だから私達ソレスタルビーイングはアロウズと戦っているの。」

「でも、だからと言って戦いで解決しようとするのも違う。ソレスタルビーイングだってやってる事は同じじゃないですか？」

「アナタの言いたい事は分かるわ、でも連邦議会に入って中から変えていこうとしたら時間が掛かりすぎてしまう。その間に世界は変わってしまうわ。・・・結局私達にはこうするしか手段がないのよ。」

「正しい事なんて何処にもないんですね・・・」

「そうなのかもしれないわね。でも私達の戦いが後の世に繋がる事を信じてるわ。」

「なら俺も信じます、自分のやるべきと感じた事を。だからユニコーンでアロウズと戦います。」

その言葉はスメラギは驚いた、今回の件は確かに助かった。

だがこれからもアロウズと戦うとなると死が付きまとう事になる。

この少年にそれほどの意思と覚悟があるのだろうか。

それにまだバナージの身元が詳しく分かっていない。

残した家族や友達の事はいいのだろうか。

私にはもう誰も残っては居ないのだけれど・・・

それを思うと素直に歓迎は出来なかった。

「バナージ君、でもアナタは私達とは関係が・・・」

「でも、こんな理不尽を許しちゃいけないんだ。それが俺とユニコーンに託された想いなんです。」

「これは戦争なのよ、もしかしたら死ぬかもしれない。それでも・・・！」

「俺は負けません、生きて帰るんです。」

そう、向こうではオードリーが待っている。

俺との約束を信じて待っているんだ。

だから死ねない、死ぬ訳にはいかない。

「本気・・・なのね？」

「はい、覚悟は決めています。」

「・・・分かったわ、でもその前にアナタのパイロット適正を調べさせてもらうわよ。イアン、バナージ君にシミュレーターを受けさせてあげて。」

「ああ、それはいいがいつするんだ？」

「今すぐやりましょう、いいですよねスメラギさん？」

「いいけれど疲れてない？戦闘が終わってそう時間も経っていないけど。」

「大丈夫です。イアンさん、そのシミュレーターやらせてください。」

「

「だとよ、そう言う訳だから連れてくぞ。」

「ええ、お願い。」

スメラギが言うといアンはブリッジの扉まで歩いて行く。

パネルを操作し扉を開けるとそれに続きバナージはイアンに付いて出て行く。

ブリッジに残ったスメラギは一人ため息を付いた。

「あまり賛成は出来ないけど・・・それにしても、本当に彼の情報がデータベースに無いのは何でなのかしら・・・」

顎に右手を当ててその事について考えるスメラギ。

初めて会った時にインダストリアル7の78番街に住んでいたと言っていたがそこは工業団地だ。

この年で働いていたのだろうか、だがそれ以前に7ー78番街なんて場所は存在しない。

「どうなっている、コレは？」

「アロウズの仕業だ、そしてその原因は彼にある。」

泣き崩れる沙滋を見る刹那、詳しくは分からないがティエリアの言っている事は正しいのだろう。

戦いを嫌がっていた沙滋だが、もう引き返せない所に来てしまったらしい。

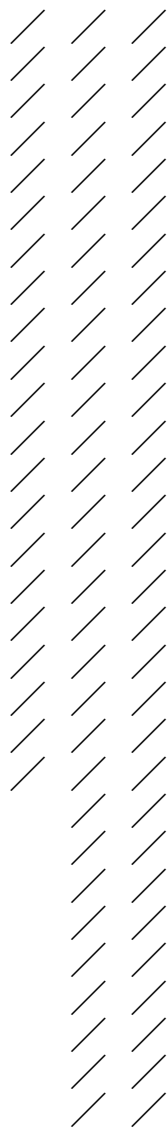
これもソレスタルビーイングのガンダムが武力介入して起こった歪みなのだろうか。

こうしてまた悲しみを広げてしまった。

そんな自分が彼に何と言えはいいのだろうか。

「沙滋・クロスロード・・・」

ただ静かに名前を呟いた。



イアンからシミュレーターのデータがブリッジのスメラギに送られてきた。

バナージは適正は基準を上回っており取りあえずは戦力にはなる。

「これで少しは戦いやすくなるわね、また新しくプランを考えないと。」

データを見て他の4人とフォーメーションを組めるように思考を巡らした。

ブリッジのコンピューターで次々と新しく戦術プランを組み立てていく。

「あのユニコーンのシールドにはビームを防ぐ機能がある。だから・・・」

だがこのデータはコンピューターで測ったデータであり実際の戦闘でのバナージのニュータイプとしての能力とサイコフレームの驚異

的なインターフェイスについて彼女はまだ知らない。

第十六話 晴れない疑惑（後書き）

コメント、アドバイス等お待ちしております。

第十七話 再び戦地へ

「ソレスタルビーイングが早急に基地を離れる資材や食料を手配するそうだ。」

自室でロックオンは自身の持っている通信機で崩壊した基地に居るクラウスに連絡を取った。

迂闊にプトレマイオスの通信機を使つてばれる訳には行かない。

通信画面の向こう側のクラウスの顔は少し疲れているようだった。

「他の施設に移送が完了するまでは俺達が防衛する。」

「そうか、助かると彼らに伝えてくれ。・・・一体、誰がここの情報を流したんだろうな？」

クラウスの疑問にロックオンは鼻で笑った。

「スパイの俺にそれを聞くのか？」

するとスメラギの声で艦内に通信が流れた。

「全員至急ブリッジに集合してちょうだい。」

艦内放送を聞くとロックオンの表情が変わった。

いつものニヒルな表情ではなく、その目は鋭かった。

「呼び出しが掛かった、通信終了。」

通信機の電源を切ると制服の緑の上着を纏い部屋から出て行った。

「みんな集まったわね、これからの私達の行動についてだけど・・・ミレイナ、カタロンの状況は？」

ブリッジに集まったメンバーを見るとスメラギは話を始めた。

ミレイナはパネルを操作するとモニターに基地内部の映像を映し出した。

「カタロンさん達の移送開始は予定通り1200に行われるです。」

「アロウズはもう一度ここに来る可能性が高いわ、そこで私達が囚になって時間を稼ぐプランよ。各員は戦闘に備えてちょうだい。それからもう一つ、新しいメンバーを紹介するわ。」

そう言うとスメラギはブリッジの扉の前まで歩いて行きロックを解除した。

「もう知っている人も居ると思うけど紹介するわね、バナージ・リンクス君、機体は彼が乗っていたユニコーンにそのまま乗ってもらいます。これからは一緒に戦っていく仲間よ。」

扉の前にはバナージが立っておりスメラギに誘導されるがままブリッジに足を進めた。

全員の視線がバナージ一点に集中する。

「よ、よろしくお願いします・・・」

「慣れるのに時間が掛かるかもしれないけど頑張ってね。他のみんなも紹介するわ。」

スメラギは残りのメンバーについてバナージに紹介した。

その間もみんなの視線はバナージに集まっていた。

「戦況オペレーターのフェルト。」

「よろしくね、バナージ君。」

「砲撃士兼操舵手のラッセ。」

「ラッセ・アイオンだ、頼んだぜ。」

「それである子がミレイナ、フェルトの補佐やガンダムの整備もしてもらってるわ。」

「はいです！バナージさんこれからよろしくです！」

ミレイナは一人バナージの近くまでくると両手を握りしめた。

彼女のようなタイプの女性と会った事の無いバナージは少し戸惑いながらも苦笑いした。

オードリーは小さい頃からの英才教育で上に立つ者としての心構えを持っており少女のようなあどけなさはあまり感じられない。

マリィダさんは過去の辛い記憶もあるが軍人としての使命を真っ当にしていた。

ミコットのようないい感じでもない。

みんなどうしているんだろう・・・

戸惑いながらもメンバーの紹介が終わるとスメラギが各員に指示を

出す。

「ラッセ、トレミーを海岸線に向けて発進させて。」

「了解、敵さんに見つけてもらわないとな。」

「フェルトは周囲の索敵をお願い。ミレイナ、光学迷彩を解除して。」

「了解」です」

「マイスターはガンダムで待機、バナージ君アナタにも出撃してもらいます。」

「分かりました、ユニコーンで出ます。」

「イアンにあの機体に合わせて武器を調整してもらったわ、後で確認してちょうだい。フェルト！」

「GNドライブ出力安定、プトレマイオス発進します。」

プトレマイオスに付いている2基のスラスターから緑色の粒子が放出する。

ゆっくりと砂の上から浮かび上がるとそのまま上空へと飛んでいった。

バナージはブリッジを後にする、パイロットスーツに着替えようとモビルスーツデッキに向かった。

「結局戦うしか出来ないのか、俺は・・・」

ユニコーンの元へ向かう途中でガンダムマイスターの一人である刹那・F・セイエイがバナージを待っていた。

立ち止まるバナージに刹那は近寄ると疑問に思っていた事を聞いた。

「お前がああ白いガンダムのパイロットなのか？」

「アナタはたしか・・・」

「コードネームは刹那・F・セイエイだ。それよりも答えてもらおうぞ、あのガンダムについて。」

ユニコーンがガンダムに変身するのを知っているのはソレスタルビーニングのメンバーでは刹那とティエリアだけだ。

スメラギの話を聞いたバナージはユニコーンの分析があまり進んで

いないのを知っている。

だからガンダムについては知られたくは無かった。

特にサイコフレームは原因不明のエネルギーを生み出す。

ユニコーンを作ったアナハイムの技術者でも分からなかったのだからバナージにも分かるはずが無い。

それを解読されたら悪用されかねない。

それはユニコーンを託してくれた父の思う所ではないはずだ。

「あれは譲ってもらったんだ、だから俺はユニコーンの事はあまり知らないんだ。」

「では何故、何の為に戦う？」

「戦うのに理由が必要なんですか？」

「あの力は強力すぎる、覚悟のない者が乗るべきではない。」

その言葉にバナージは怒りを覚えた。

これまでの袖つきとフル・フロンタルとの戦いで死んでいった人達を侮辱する行為だ。

その人々の想いはユニコーンを通してバナージに託されている。

ロニさんもマリィダさんも俺の中で行き続けている。

もうこれ以上繰り返してはいけないんだ。

悲しい思いも、憎しみの怒りも。

「覚悟ならあります！俺はユニコーンで戦います！」

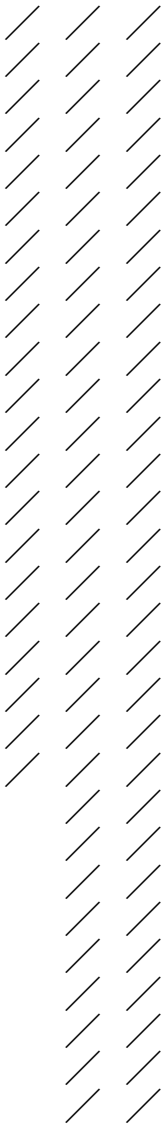
「そうか・・・分かった。俺が前に出る。」

「え・・・？」

「お前は後方から援護しろ。」

そう言うのと刹那もパイロットスーツに着替えにいく。

刹那の背中を見てバナージも急いで付いていく。



刹那と一緒にカタロンの基地へと戻ってきたマリナ、瓦礫に埋もれる基地を見て呆然とする。

「シーリン、シーリンは？」

数時間前まで子供達と一緒に居た場所が今は見る影も無かった。慌ただしく動く人々の中からシーリンを探そうとする。

だがその中に彼女の姿を見つける事は出来なかった。

「そんな・・・」

彼女が居ない、その現実がマリナを悲しみへと誘う。

まぶたに涙が溜まっていく。

アザディスタンを救う事も出来ず、彼女までも死なせてしまった。

「アザディスタンに戻ったのじゃなかったの？」

聞き覚えのある声が聞こえた、急いで後ろに振り向くとそこに彼女は居た。

目だった怪我も無くシーリンはいつものままだった。

「シーリン・・・！」

マリナは涙を流しながらシーリンの胸に飛び込んだ。

「どうしたの？涙なんか流して。」

「よかった・・・無事で・・・」

声を枯らせながらマリナは胸の中で泣き続けた。

そんな彼女を優しく抱きしめた。

「シーリン・・・アザディスタンが・・・私達の故国が・・・」

「！？アザディスタンがどうしたの？」

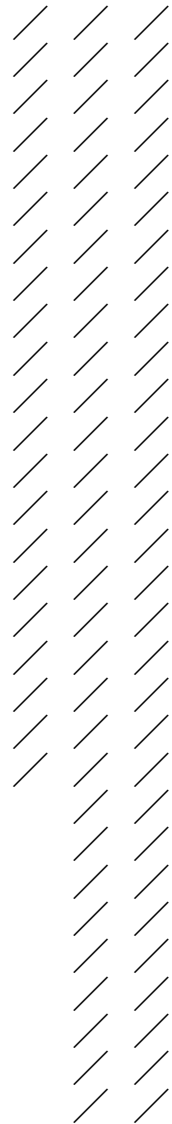
燃えさかるアザディスタンの事を言おうとした。

だが彼女達の上空をソレスタルビーイングのプトレマイオスが飛んでいた。

瞳に大きく写るプトレマイオスも見見る内に遠ざかり次第に見えなくなる。

「行くのね、刹那。」

再び戦いの中に身を投じようとする刹那をマリナは思い続けた。



ブトレマイオスは故意にレーダーの索敵に引っかかる事でアロウズの注意をこちらに引き付けカタロンが移送するまでの時間を稼ぐつもりだ。

その為にGN粒子はあまり散布せずに移動している。
レーダーの索敵圏内に入って20分ほど経過した。

「そろそろ索敵空域に入るわ、ガンダムを出して。」

ブリッジのシートに座りスメラギは作戦プランを考えながら指示を出す。

「第1、第2デッキ、ハッチオープンです。」

「アリオス、セラヴィー発進準備。」

フェルトとミレイナがガンダムの発進を進めていく。

ブトレマイオスのハッチが開放される。

モビルスーツデッキからリフトでセラヴィーが運ばれる。

足をカタパルトで固定される、目の前には青い空が広がっていた。

「リニアカタパルト、ボルテージ上昇。射出タイミングをセラヴィーへ譲渡します。」

「了解。セラヴィー、ティエリア・アーデ行きます。」

ティエリアがアームレイカーを動かすとカタパルトが火花を上げ高速で移動する。

そのまま勢いに乗りセラヴィーは飛び出した。

それに続きアリオスも発進体勢に入った。

「ユーハブコントロールです。」

「I have control アレルヤ・ハプティズム迎撃行動に入る。」

片言のミレイナの指示に従いアレルヤのガンダムも発進する。

「続いてケルディム、ダブルオーの発進に入ります。リニアシステ

ムクリア、射出タイミングを譲渡します。」

「ハロ、今日は本気モードで行くぞ!」

「リョウカイ、リョウカイ」

ケルデイムのコクピットでオレンジ色のハロが耳をパタパタとしている。

「ロックオン・ストラトス狙い打つ!」

ケルデイムが2機に続きプロトレマイオスから発進する。

刹那はイアンに調整したダブルオーの説明を受けていた。機体には新たに7本の剣が装備されていた。

「いいか、セブンスードは急場凌ぎの武装だ。装備も重くて機動性も少し落ちる、無理はするなよ。」

「了解、刹那・F・セイエイ出る!」

7本の剣を見に纏いダブルオーが発進する。

白いパイロットスーツを着たバナージはユニコーンの新しい武装の使い方を頭の中でイメージしていた。

「アサルトカービンって武器、使いこなせるのか、俺に?」

ユニコーンが右手に握っているのは本来ケルデイムが装備するはずだった。

だがビームサーベルしか武器がないのでは戦う事が出来ない為、急遽ユニコーンにも使えるように調整した。

「バナージさん!」

コクピットのモニターにミレイナの顔が映し出される。

いつもの事だがバナージは彼女のテンションに慣れなかった。

「そのアサルトカービンはGN粒子を貯蔵してユニコーンさんにも撃てるように調整しましたです。でもあまり数は撃てませんので注意してくださいです。」

「分かりました、エネルギーに注意すればいいんですね?」

「はいです!進路クリア、発進どうぞです!」

「バナージ・リンクス行きます!」

カタパルトに射出されユニコーンは大空へと飛び出した。

第十七話 再び戦地へ（後書き）

正直セブンスードは映像化されていないのであまり分かりませんがいろいろ資料を調べて次の話で書きたいと思います。

詳しく知っている方が居ましたらアドバイスしていただけるとうれしいです。

ユニコーンの武器は今回はアサルトカービンで行きます。

コメントを書いてくれたSさんありがとうございます！

第十八話 ミスターブシドー

ブリーフィングルームでマネキンはレーダーの索敵網に探知されたソレスタルビーイングの輸送船の撃破の為作戦会議を開く。

「監視衛星がソレスタルビーイングの所在を掴んだ。モビルスーツ隊はプランE-3で輸送艦を包囲する。」

スクリーンに映し出される地形図を元にマネキンはブリーフィングルームの集まった兵に説明をして行く。

「そこで我々は・・・」

「失礼する。」

「お前は・・・」

「肩に動力のある2個付きのガンダムは私が合間見える。干渉、手助け、一切無用。」

作戦会議の真っ最中だと言うのに突然扉を開けて彼はやって来た。マネキンは途中で話に割って入ってきた事と、作戦を聞かず単独行動をすると言う彼に苛立つ。

「何だと・・・！」

ブリーフィングルームが作戦前の緊張した空気とは違い一触即発が起こりかねない空気になる。

それを見かねた一人の兵士が立ち上がりマネキンをなだめようとする。

「まあ、いいではないですか？ マネキン大佐。ライセンスを持つ噂のミスターブシドー、その実力拝見したいものです。」

彼は威嚇するように棘のある言葉でそう言った。

ソレに続くように部屋に居る者すべてがミスターブシドーに煽る様な眼差しを向ける。

だが彼はそんな事は一切気にしなかった。

「ご期待にはお答えしよう。叱らば。」

一言そう言うミスターブシドーは立ち去った。

顔に付けている仮面の奥の瞳には何が写っているのだろうか？

「……作戦を開始する。」

マネキンは彼をじっと見つめるとソレスタルビーイングの打倒の為作戦を開始する。

「はっ！」

全員が起立しマネキンに敬礼をする。

彼女もそれに答えて敬礼を返すと兵達は各自のモビルスーツに搭乗する為に部屋から出て行く。

連邦軍の大型空母からアロウズのモビルスーツが随時発進をして行く。

最新型のジンクスとアヘッドで構成されたモビルスーツ部隊が飛び立っていく。

その中に一際目立つ赤いアヘッドが居た。

頭部には兜を模した大型アンテナが付いており、胴丸状の胸部追加装甲が施されている。

その姿はまるで鎧武者のようだ。

「ガンダムを確認した、これより作戦行動に入る。これより各小隊に分かれてガンダムを各個撃破する。ミスターブシドー？」

「何か？」

「ドライブ二つのガンダムは任せますよ？」

「望む所だと言わせて貰おう。」

今回の作戦にもソーマ・ピーリス、彼女は参加していた。

自身の脳量子派を乱すアレルヤを今度こそ仕留めてみせる。

「我が隊の目標は羽根付きだ。」

「了解です、中尉。」

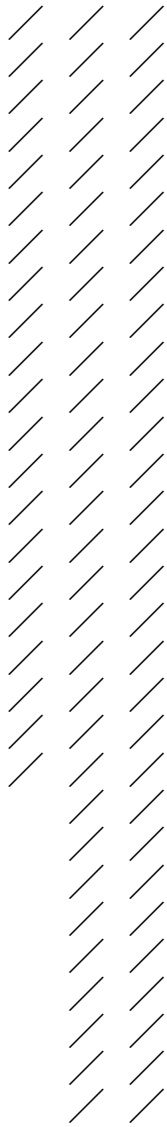
ピーリスの部下であるアンドレイ・スミルノフは通信でそれに答える。

「行くぞ！」

ピーリスの機体に続き3体のジンクスが付いていく。

「ついに仇が討てるよ、パパ、ママ。」

その中でルイス・ハレヴィは憎しみの光りを募らせていた。



「敵機を視認、これより作戦行動に移る。」

ティエリアがアロウズのモビルスーツを見つけた。

プトレマイオスから発進した5機のガンダムがスメラギのプランに従いコンビネーションを取りながら攻撃を開始する。

各機散開するとセラヴィーのGNバズーカを両肩のGNキャノンと連結させる。

「ツインバスターキャノン、発射！」

大出力のビームがアロウズのモビルスーツ部隊に発射される。

だが今までのガンダムの戦闘データの分析も進んでおりビームはあっさりと回避されてしまう。

1機のジンクスがGNランスを構えてセラヴィーに突進してくる。

「落ちろガンダム！」

ティエリアは素早く反応しGNバズーカを両肩から切り離す。

迫り来るGNランスにGNバズーカを斜めに宛がい攻撃を受け流す。その一瞬、敵の動きが止まる。

右膝のGNキャノンをコクピットに向けて発射する。

「このくらい！」

「避けた!？」

ビームを避けたジンクスがGNランスに搭載されているバルカンを撃つ。

ティエリアは回避行動を取りながらGNフィールドを展開し機体を守る。

「俺の事忘れてもらっちゃ困るぜ。」

ジンクスの右足にビームが突き刺さり破壊される。

バランスの崩れた機体にもう一撃ビームが飛んで来る。

ビームは脇に当たりジンクスを2つに両断すると爆発した。

ロックオンの乗るケルデイルが海上スレスレを仰向けに飛行しながら狙い打ったのだ。

「メイチュウ、メイチュウ。」

「言っただろ、今日は本気モードだって！」

スコープを覗きながらロックオンは次のターゲットに狙いを定める。刹那、アレルヤ、バナージは3機で連携を取りながら確実に敵機の数減らしていった。

「僕が敵をかく乱する、その間に！」

「了解、バナージは援護してくれ！」

「分かりました。」

アリオスが単機でモビルスーツ部隊に突入する。

一斉にアリオスにビームが飛んで来る。

アレルヤは巧みな操縦技術で機体をコントロールしすべての攻撃を回避する。

ガンダムの高い運動性能が超兵の反応速度に答えてくれる。

GNビームサブマシンガンを構え敵機にビームを連射していく。

回避行動を取りビームは当たらないがそのせいでわずかな間連携を崩されてしまう。

各機の機体の間隔が広がってしまう。

刹那はダブルオーの左肩にマウントされているGNバスターソードのグリップを握り締める。

右手でGNバスターソードを構えるとツインドライヴの出力を上げ機体を加速させる。

「はあああああああ！！！！！」

ダブルオーのバスターソードをシールドに発生したGNフィールドで防ごうとするジンクス。

だが刹那はGNフィールドを貫通しシールドごとジンクスの左腕を

切断する。

片腕をなくしたジンクスは後方に下がりながらGNランスのバルカンを連射する。

刹那はガンダムに回避行動を取らせようとするが・・・

「くっ！？機体が重い！」

イアンの言っていたように今のダブルオーにはこの武装は重量が重く機動性が下がってしまう。

とっさにバスターソードのGNフィールドを発生させる。

ダメージは通らないがバルカンの衝撃がコクピットを揺らす。

「くっ！？このままでは・・・」

機動性の下がったダブルオーではこの攻撃は避けきれない。

「下がってください！」

ユニコーンのアサルトカービンがジンクスの頭部を一撃で破壊した。破壊された頭部から煙をあげてるジンクスにバナージはもう一度ビームを撃った。

ビームが直撃しジンクスは爆発し破片が海へと落ちていく。

「無事ですか？」

「助かった、次へ行くぞ。」

難を逃れた刹那はまた次の目標へ向かう。

やはりダブルオーの出力ではこの装備は重すぎる。

それはバナージでも見て取れた。

タクヤの設計したフルアーマーもデストロイモードの状態でないと著しく性能が下がってしまう。

このまま機動性が下がったまま戦闘を継続するのは厳しい。

だがプロレマイオスに帰還する暇などない。

「刹那さん、今の武装だと機体が・・・」

「分かっている、武器を放棄するしかない。バナージ、後方を頼む。」

ダブルオーが先行して前に出てアリオスがかく乱した機体に狙いを定めた。

左手にもGNショートソードを握らせる。

「目標を破壊する！」

ガンダムにバルカンを撃ちながら接近してくるジンクス、弾を回避しながら何とかショートソードの射程範囲まで近づく。

「貰ったぞ、ガンダム！！！」

大腿部装甲内からビームサーベルを引き抜きさらに加速を掛ける。

「ここだ！」

ショートソードの先端が射出されビームサーベルを握っている左腕に突き刺さった。

そのままパワー任せにアンカーを引っ張った。

「なっ何だ！？」

アンカーで姿勢の制御を一時的に出来なくなる、刹那は動きの取れない敵機の胸部にバスターソードを突き刺した。

「バナージ！」

「撃ちます！」

バナージにそう言うのと刹那はすぐに離脱した。

刹那に構わずバナージはアサルトカーabinをジンクスに撃ち込んだ。狙いは正確でビームは装甲を貫き背後のGNドライヴに当たり機体はバスターソードとショートソードと共に爆発する。

「刹那さん、ダブルオーに接近する機体があります。とんでも早いです！」

ミレイナから敵の情報が通信で伝えられる。

レーダーで確認するとダブルオーに向かい単機で接近してくる機体がある。

「あの新型は！？バナージ、アイツは俺がやる、アレルヤの援護を頼む。」

「でも一人じゃ！？」

返事も聞かぬままダブルオーは接近してくる敵に飛んでいく。遠ざかるダブルオー、バナージはアレルヤの援護に向かった。

G Nロングソードをライフルモードに切り替る。

ロングソードは出力は今までと比べ上がっているが連射性能が下がってしまっている。

接近してくる機影にビームを放つ、スラスターを右に噴かせ回避する。

すぐにもう一撃ビームを放つがこれもまた避けられてしまう。

「射撃も上手くなった。」

彼の為に作られた専用機、アヘッドサキガケ。

そのコクピットの中でパイロットのミスターブシドー、グラハム・エーカーは喜びに震えていた。

刹那は射撃に見切りをつけソードモードに切り替え相手に振りかぶる。

「はああああ！」

「ソレでこそだ少年！！！」

日本刀の様な刀身のG Nビームサーベルを左腰から引き抜く。

鏑迫り合いになるガンダムとアヘッドサキガケ、再び合間見える二人。

これもまた世界の歪みなのだろうか・・・

第十八話 ミスターブシドー（後書き）

アドバイス、感想お待ちしております。

第十九話 宿命の第一戦

鏢迫り合いになる両者、刹那は慣れない武器での戦闘に苦戦を強いられていた。

重量バランスが整っておらずツインドライヴの出力も低下してしまう。

その事を戦いの中でグラハムは気付いていた。

「その新装備、使いこなせていないようだな！」

アヘッドのビームサーベルを振り払う。

接近戦に特化した機体のアヘッドは今のダブルオーと比べて戦闘能力が高い。

機体のポテンシャルをフルに使い切る事で接近戦ではガンダムと対等に戦う事も可能なように設計されている。

そしてグラハムにはそれが出来た。

「ぐっ!？」

アヘッドのパワーに握っていたGNロングソードを振り落とされてしまう。

そのパワーで機体のバランスも崩されてしまい背部から海に落ちそうになる。

両手に武器の無くなったダブルオーにグラハムの猛撃が迫る。

ビームサーベルでガンダムに斜めに一闪する。

「いいや、まだだ！」

刹那はガンダムの右足を蹴り上げた。

ふくらはぎに増設されたハードポイントにGNカッターが装備されている。

刃にはクリアグリーンの新素材を使用しており超高温で高い切断力を生み出している。

ビームサーベルを右足のGNカッターで無理やり斬り付けるとぶつかり合った刃から激しく火花が飛び散る。

「このような技を持っているとは、うれしいよ少年！」

刹那はGNカタールで攻撃を斜めに受け流す。

そのまま勢いを付け機体を一回転させ姿勢を元に戻すと振り向き様に左手にビームサーベルを握る。

だがグラハムの反応も素早く再びビームサーベル同士で鏝迫り合いになる。

「やるな・・・！」

「この程度の攻撃で、私を倒す事など！」

刹那はガンダムの背中を反らせ今度は左足のGNカタールをアヘッドのわき腹に向けて蹴り上げる。

「やらせはせん！」

グラハムは蹴りが届く前に右腕のシールドで足を受け止めようとした。

だが彼は新装備で性能の下がっているダブルオーに僅かながら油断があった。

足に装備されているGNカタールの向きが変わった。

今までは地面に向かって装備されていたがダブルオーの前方に向きが変わりリーチが伸びた。

しかしシールドに突き刺さりはしたが装甲にはダメージが通らない。それを見ると左足からGNカタールをパージする。

「GNダガー！」

素早い動きで右手でGNビームサーベルをダガーモードに出力を合わせシールドに刺さっているGNカタールに目掛け飛ばす。

ダガーはそのまま突き刺さり貯蔵されていたエネルギーが爆発する。爆発でアヘッドの右腕が破壊されてしまう。

だがこの程度の事で引く彼ではない。

その隙にアヘッドから距離を取る刹那、背を向けて海面の上を移動するダブルオーをグラハムは見逃さない。

「逃がすものか！」

ダブルオーを見つけるとアヘッドをフルパワーで加速させる。

加速による物凄いGが体に掛かるがそんな事は気にしない。
残った左腕のビームサーベルを渾身の力を込めて振りかぶる。
再び接近するアヘッドに振り返るとビームサーベルで受け止める。

「このままでは・・・！」

こんな所で時間を掛けすぎでは作戦に支障が出てしまう。

それに新型のアヘッドの性能とパイロットのグラハムの技量が想像
以上に高い。

残りの武装も少なく押し切られるかもしれない。

この状況を打破する為、刹那はダブルオーの右足のGNカッターで
海面を蹴り上げた。

高温の刃が海水を水蒸気に変え少しの時間ではあるがスモークの変
わりになる。

アヘッドのビームサーベルが空を斬った。

「目くらましなど。」

グラハムは精神を集中させ周囲の空気を感じ取る。

この場ではレーダーなど無用、信じられるのは己の心眼のみ。
スモークで視界の見えない中に一瞬緑色の光りが横切った。

「!!!!」

ビームサーベルを横に一閃すると飛んできたGNカッターを弾き飛
ばす。

これは次への攻撃を繋げる為の布石、本命は・・・

「後ろだ！」

ダブルオーとアヘッドのビームサーベルが交わり激しく火花が飛び
交う。

グラハムは小手先の技で戦うガンダムに苛立ちを感じていた。

「歯ごたえがない！手を抜くか、それとも私を侮辱するか！」

怒りがそのままパワーとなりダブルオーを押しに行く。

このままでは負ける、刹那は覚悟を決め残された手段を使う。

「ガンダム、引導を渡す！」

「トランザム!!!!」

刹那が叫ぶとトランザムシステムが発動する。

オリジナルの太陽炉に搭載されているシステムで高濃度圧縮粒子を全面開放する事で機体の性能を一定時間ではあるが上昇させる。

ダブルオーの装甲が赤く発光しアヘッドの攻撃をすり抜ける。

「これは!？」

ダブルオーのスピードが今までとは比べ物にならないほど早くなる。その姿にグラハムは歓喜した。

「そうだ、それとやりたかった！」

目にも止まらぬ速さに動くダブルオー、メインカメラのセンサーも反応が出来ずに残像が残る。

「はああああああ!!!!!!」

正面から迫るダブルオーにグラハムはビームサーベルの出力を下げた。

それによりグリップの根元に少しビームが発生しているのみでとても戦闘など出来ない。

「修行の成果、試させてもらう。」

左腕を右脇に構える、その構えは日本刀の居合い斬りの構えと同じだ。

トランザムで接近するダブルオーに斬る瞬間にのみビームの刃を発生させる。

アヘッドを通りすぎるダブルオー、その手にはビームサーベルがしっかりと握っていた。

「さらにやるようになったな少年・・・」

左腕が斬り落とされる、勝ったのは刹那。

だがツインドライブが煙を上げ機体の色も元に戻る。

コクピットには警告音が鳴り響き戦闘画面にはオーバードロードの文字が出ていた。

出力が上がらずダブルオーは海に沈んだ。

「オーバードロード!？」

もうダブルオーには戦闘能力は無い、それを見てグラハムは撤退し

た。

「相打ちと言いたいが、私の負けだ。また会おう、少年！」



刹那の指示に従いアレルヤの援護に入るバナージ。

アリオスはルイスとアンドレイの2機のジンクスとピーリスの搭乗したアヘッド・スマルトロンに囲まれていた。

ジンクスはGNランスのバルカンを2機で挟み込むようにして撃ち続ける。

2機による連携をアレルヤはスラスターを吹かし巧みに避けていく。ユニコーンの射程範囲まで近づいたバナージはその1機に狙いを定める。

「当たってくれよ。」

アームレイカーを握りユニコーンが右腕に持っているGNアサルトカービンのトリガーを引く。

銃口からビームが発射されジンクスに飛ぶ。

パイロットのルイスは敵であるガンダムにしか目が行っていない。

ビームが左腕に直撃し破壊されてしまい、その時になってやっと白亜の機体の存在に気付いた。

「何！？どこから攻撃が・・・！」

「准尉、新手だ。私が前に行く、援護を！」

ジンクス2機の連携攻撃が止む、ユニコーンをアリオスに接近させるバナージ。

「無事ですか？」

「助かったよ、刹那は？」

「アノ人なら大丈夫です、とにかくここを切り抜けましょう。」

ピーリスは背部の大型スラスターを吹かしビームサーベルを引き抜

く。

「来ます！」

ピーリスの機体に銃口を向けるバナージ。

だが脳量子派でパイロットがピーリスだとアレルヤは気付いていた。

「待ってくれ、アレにはマリーが！」

「マリー・・・？」

アレルヤの呼びかけに攻撃を止め回避行動に切り替える。

接近するアヘッドのビームサーベルが振りかぶる。

ランドセルのバーニアを吹かし高度を上昇させるとユニコーンを回避させる。

アレルヤは通信でピーリスを説得しようと必死に叫ぶ。

「僕だよ、マリ、アレルヤだ。昔、ラボで一緒に居た・・・」

「私はマリーなどと言う名前では無い。私は超兵だ！」

だがアレルヤの声は彼女には届かなかった。

バナージは2人の脳量子派を通してその事に気付き始めていた。

「このままじゃダメだ！」

彼女は暗い心の中に引きずり込まれている。

このまま呼びかけても声は届かない。

心の呪縛を解いて上げないと、でもどうしたら・・・

バナージはかつての戦いを思い出す。

ロニさんもマリーダさんもリディ少尉だって戦いの中で分かり合うことが出来たんだ。

だからあの2人だって出来るはずなんだ。

でも今のままでは説得もままならず倒されてしまう。

「アレルヤさん、避けて！」

ピーリスのアヘッドがビームサーベルを突き刺そうと突撃して来る。だがアレルヤは避けなかった。

右腕を故意に前に出しビームサーベルを受け止める。

当然ビームの刃が装甲を貫くが左手でがっちりアヘッドを掴み放さない。

ビームが装甲を溶かし火花が飛ぶ、コクピットが激しく揺れる。

「もう放さない、マリィ。」

「コイツ・・・！」

ピーリスはアームレイカーを動かすが機体はビクとも動かない。

「アレルヤさん！くっ！？」

アンドレイとルイスのジnkクスがユニコーンに攻撃を仕掛けてくる。

バナージが応戦する為目を放すとアリオスのGNドライヴがオーバーロードで出力が下がる。

アヘッドとアリオスは抱き合ったまま落下していく。

第十九話 宿命の第二戦（後書き）

感想、アドバイスお待ちしております。

第二十話 離別（前書き）

あまり話が進まずスイマセン。

アサルトカービンの次は何の武器を使えばいいんだ!?

とりあえず次の話にマリーダさんを出す? 予定です。

第二十話 離別

バルカンの弾をシールドを前に出し防ぎながらGNアサルトカービンを放つ。

正確な射撃がアンドレイに迫るが落ち着いてシールドのGNフィールドを発生させる。

銃口から発射されたビームがシールドに受け止められ相殺されてしまう。

「ビームが効かない、あの機体にもフィールドがあるのか？」

擬似太陽炉により連邦軍の技術も飛躍的に上昇し今ではGNフィールド発生装置を作れるまでになった。

だがガンダムとは違いまだシールドに限定してしか発生する事は出来ない。

ココに着たばかりのバナージはGNドライブの特性をまだ把握していなかった。

「沈め角付き！」

アンドレイは機体を加速させビームサーベルを振りかぶろうとした。ユニコーンはジンクスが腕を振るよりも早くスラスターで機体を制御しスルリと横に回避した。

「そんな・・・避けた!？」

その超人的な反応速度にアンドレイは驚いた。

シールドで受け止めるならまだしも避けるだなんて！

機体の性能だけではない、何なんだコイツは・・・？

「今はコイツに構っている時間はないんだ。アレルヤさんを助けな
いと！」

ユニコーンの右足から蹴りが飛んで来る。

脇腹の装甲に重い衝撃が掛かりコクピットにいるアンドレイを激しく揺らす。

「ぐああああああつ!？」

機体にはたいしたダメージはないが意識が飛びそうになる。

そのわずかな間は制御が出来ず無防備な状態になってしまう。

「よくも少尉を！」

機体を立て直したルイスが援護に入る。

バルカンを敵に向かい一心不乱に撃ち続ける。

「落ちろ角付き！！！」

「また来る！？」

回避行動を取りながら左腕のシールドで避け切れない弾を防ぐ。

同時にGNアサルトカービンをジnkxsに1発だけ放つ。

攻撃する事に夢中になっているルイスはスラスターを必要以上に吹かし機体を大きく移動させてしまう。

「動きすぎたな。」

操縦桿を素早く操作しトリガーを2回引いた。

ビームが発射されるとききのノックバックがあるにも関わらず2発目のビーム射撃も正確だった。

1発目のビームが右足にかすめる。

「くっ！？」

機体の制御に乱れが生じてしまう、2発目のビームが右手に握っていたGNランスに直撃し破壊されてしまう。

ルイスの目の前には武器を構えたユニコーンが居る。

マニピュレーターも動かなくなってしまうい攻撃を防ぐ手立てはもう無い。

「殺られる・・・！？」

目に見える風景がスローモーションで動いているようだった。

死を覚悟したルイス、両親の仇も討てぬままここで死んでしまうの・・・？

沙滋、最後に一目だけでも見たかった。

まぶたをギュッと閉じ体を強張らせ死の恐怖を和らげる。

「・・・撃ってこない？」

しかし目を閉じて数秒、機体に変化は無かった。

恐る恐る閉じていたまぶたをゆっくりと開けると、白亜の機体はまだ目の前に居た。

「弾切れ！？こんなに早いなんて・・・！」

トリガーを引くが銃口からビームは発射されなかった。

武器に貯蔵されているGN粒子が底を突いたのだ。

GNドライブ搭載機なら自身のGNドライブの粒子を武器にチャージする事でエネルギー切れを防ぐ事が出来る。

しかし核融合炉で動いているユニコーンにはそれは出来ない。

「もうあの機体は使えないはずだ、アレルヤさんを！」

攻撃の手段をなくしたルイスのジnkスを見て構えを解いた。

機体を方向転換させアヘッドと共に落下していったアレルヤのアリオスを探そうとする。

逃げようとするユニコーンにルイスはまだ戦いを挑もうと闘志を撒き散らす。

そこにアンドレイが急いで駆けつけた。

「情けのつもりか！私はまだ・・・！」

「引くんだ准尉！」

「私はまだ戦えます！」

「無理だよ、その機体はもう使えない。艦に帰艦する。」

「くっ！？ソレスタルビーイング！！！」

アンドレイのジnkスに引きつられてルイスは母艦に帰艦していた。

バナージはアリオスの落下したポイント周辺をレーダーで探索するが2機とも反応は無かった。

目前には島がある、あそこに落ちたと願いたいが目視では確認出来ない。

海だとしたらさらに救助は困難となってしまう。

それにこんな場所にいつまでも居られない。

するとプトレマイオスのスメラギからガンダム全機に通信が届く。

「ガンダム全機へ、ここは一時撤退します。魚雷で高濃度粒子とス

モークを出して敵の連携を分断します。」

「待ってください、アレルヤさんがまだ・・・！」

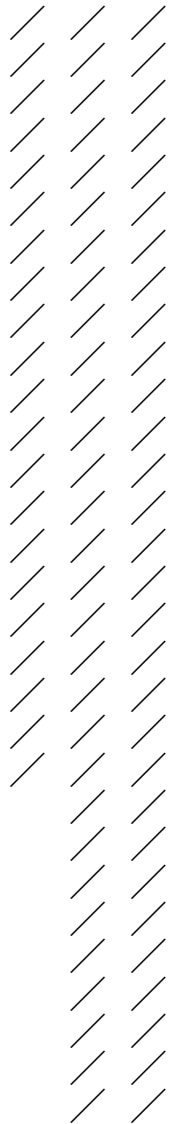
「アレルヤはこちらでも探索しているわ。バナージ君、ともかく一度帰艦して。」

「・・・分かりました、帰艦します。」

苦虫を潰す思いでスメラギの指示に従う。

すぐにプトレマイオスから魚雷が2発発射された。

広範囲のモークで視界は見えなくなり大量のGN粒子でレーダーも利かなくなる。



アロウズの指揮を執っているマネキンは撤退を始めるソレスタルビーイングを見て部隊の体制を立て直す為、コチラも撤退するよう通信兵に指示を促した。

レーダーも利かず、視界も見えないこの状況で深追いするのは危険だ。

母艦から光信号が空高く発射される。

それを見た部隊長を中心にアヘッド、ジンクスが撤退していく。

その中にピーリスの機体は居ない。

「ピーリス中尉のアヘッドをロスト？ そんな・・・！？」

ルイスは憧れに近い印象を抱いていたピーリスが負けた事にショックを受ける。

マネキンも直前の戦闘記録を元に至急搜索班を出動させた。

「スミルノフ大佐に何と報告すれば・・・」

右手の親指の爪を噛みどのように報告するべきか悩んでいた。おそらく見つけるのは困難であろう。

戦闘が終わり数時間、ピーリスが戦闘中に行方不明になったとマネキンから情報が入った。

マネキンの部隊は搜索を中断しソレスタルビーイングの追撃に出るよう上層部から命令が下った。

命令に違反する事は出来ず彼女は搜索を打ち切った。

その事を自らスミルノフに伝えた。

「大変申し上げにくいのですが、おそらく・・・」

「分かった、もういい。」

「私のミスです。申し訳ありません。」

「いいんだ、彼女だって覚悟していたはずだ。キミもそんなに気にするんじゃない。」

「・・・本当に、申し訳ありません。失礼します。」

通信が切れた、スミルノフは無言のまま彼女が戦闘していたと言う空域に向かおうとする。

空母の通信室から出るとパイロットスーツに着替えるスミルノフ。

単身でピーリスを搜索しに行こうとする。

「使える機体は何がある。」

「大佐！？どちらへ・・・？」

「中尉の搜索へ行く。」

「一人でなんて無理ですよ！？」

「・・・下がっている。」

整備兵の制止を聞かずにジンクスに乗り込む、GNドライブを起動させ空母から発進する。

「中尉・・・」

赤いGN粒子を輝かせジンクスは暗闇の空を飛ぶ。

第二十話 離別（後書き）

感想、アドバイスお待ちしております。

第二十一話 革新へ迫る（前書き）

マリーダさんが本当に少ししか登場していません。
期待していた人にはもうしわけないです。
次回もまた出します。

第二十一話 革新へ迫る

日も沈み周囲は暗闇に包まれている。

月明かりに照らされる海をプトレマイオスは飛行する。

スメラギはミッシェンレコーダーでアリオスが最後に交戦したポイントを目指す。

それは陽動の為にアロウズと交戦した場所だ。

今はもうアロウズのモビルスーツ部隊も撤退しておりレーダーにも何の反応も無かった。

だがいつまでもこんな所に留まっていたでは発見されてしまう可能性が高い。

アレルヤの救出は迅速に行わなければならない。

「残っているガンダム2機とバナージ君を発進させてちょうだい。制限時間は40分、これ以上は待てないわ。」

時間に間に合わない場合、アレルヤは置いていくしかない。

彼もガンダムマイスターとして今まで世界を変えようと戦ってきてくれた。

もしものときにどうするか覚悟は出来ている。

「ケルディム、発進どうぞ。」

フェルトがガンダムの発進シークエンスを完了させるとモビルスーツデッキからリフトでケルディムが運ばれる。

カタパルトに脚部が固定され目の前には地平線の彼方まで海が広がっていた。

カタパルトは火花を上げモビルスーツを強制的に前方へ射出させるとそのまま飛び立った。

「続いてセラヴィー、カタパルトに固定完了。いつでも発進出来ます。」

「ミレイナ、ティエリアに繋げて。」

「はいです。」

ミレイナがパネルを手早く叩くとブリッジの通信画面にコクピットに居るティエリアの顔が映し出された。

パイロットスーツを着てヘルメットを被っているティエリアの表情はいつも以上に読み取りにくかった。

「セラヴィーにアロウズとの交戦空域のデータを転送しておいたわ。もし敵が居ても戦闘は極力避けて時間内に帰艦してちょうだい。」

「了解、ティエリア・アーデ行きます。」

彼も事情を察しているのだろう、何も聞かずにそのままセラヴィーをカタパルトから発進させた。

最後にユニコーンもリフトで上がってくる。

今回は搜索がメインなので武器は持っていない。

「必ず助けます、アレルヤさん。」

後はカタパルトから射出し飛び出すだけ、するとミレイナから通信が繋がった。

何だろう？ 作戦を変更するのか・・・？

センターコンソールを叩き回線を繋げるバナージ。

「バナージさん、がんばってください！」

「大丈夫です、必ず助けて見せます。」

そうだ、俺がもっと動けていればこうはならなかったかもしれないのに。

でも悔やんでばかりもいられない、アレルヤさんは今も助けが来るのを待ってるんだ。

時間内に探さないと・・・！

「あっ！あと・・・それから・・・」

「どうしたの？」

「いっ！？いえ、何でもありませんです！！ユニコーンさん、発進どうぞです！」

いきなり頬を赤らめながら彼女は大声で叫んだ。

そのせいで耳に少しの間耳鳴りが鳴ってしまう。

何を伝えたかったのかははっきりしないがそれはまた後にしよう。

操縦桿を両手でしっかり握り締め全天周囲モニターが映し出す景色を見つめる。

「了解、バナージ・リンクス行きます！」

パイロットスーツが機体に掛かるGを軽減してユニコーンも発進した。

刹那はモビルスーツデッキで動かなくなってしまったダブルオーをずっと見ていた。

艦内放送でミレイナの声が響いている、ガンダムの無い今の自分では救出作戦に参加出来ない。

「モビルスーツ全機発進しましたです、これよりトレミーは潜行準備に入ります。」

もう何分ここに居るのだろうか、新しいガンダムを手にしてもまだ世界を変える事は出来ない。

こんなことで俺達は変われるのだろうか？ロックオン・・・コクピットを降りてからずっとその場で立ち尽くしているとイアンの怒鳴り声が聞こえた。

「刹那！トランザムは使うなと言っただろうが。ツインドライブが稼動状態にあるからいいようなものの。」

これから修理する事を考えると頭が痛くなる。

ツインドライブはまだ完璧に完成された訳ではないのだ。

修理には他の機体と比べて時間が掛かってしまう。

イアンはどうしたものと頭を抱えた。

「修理を頼む、アレルヤが・・・」

「分かってるよ。刹那、お前ももう休め。ガンダムは俺が見ておく。」

「すまない。」

刹那はイアンの言葉を聞くとモビルスーツデッキから立ち去ろうとした。

デッキと艦内とを繋ぐ扉に歩き出す。

すると突如扉が開いた、そこには彼が居た。

「沙滋・クロスロード・・・」

「オォーイ、コッチだ！」

後ろからイアンが沙滋を手招きしながら呼んでいる。

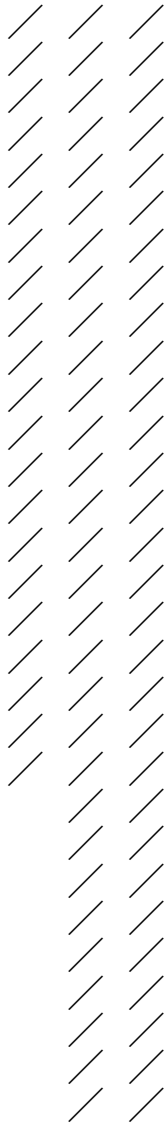
彼もソレスタルビーイングの作戦行動に何かしらの形で参加する事になった。

「いいのか、お前はガンダムに・・・」

戦うのが嫌だったはず、ソレスタルビーイングに参加すると言う事は戦いに加担する事になる。

その事を彼もよく知っているはずだ。

「いいんだ、カタロンの人達が逃げられる間では何でもやるよ。」
罪の意識に苛まれているのだろうか、その目は4年前に見た彼の目と変わっていた。



アリオスとアヘッドは組み合ったまま無人島に落下していた。

落下の衝撃と今までの戦闘のダメージの蓄積でもうまともに動く事が出来ないで居た。

島に落ちてもうずいぶん時間がたった。

脱出装置も作動せずコクピットのハッチはフレームが歪んでいる。

かろうじて生きているカメラでアヘッドの様子を見るがパイロットが気絶しているのか動く気配は無かった。

「このまま救助が来るのを待つしかない。マリー・・・」
通信でいくら呼びかけても反応は無かった。

もし目が覚めたら僕はまた掴まってしまうのだろうか。

敵が見つけるのが先か、それとも味方か・・・

今は信じるしかない、みんなが救助に来てくれる事を。

マリーの人格が元に戻っていることを。
外では雨が降っている。

「ロックオンはE-56ポイント周辺の海を、バナージはそこから見える島を探索してくれ。範囲は広いが何としても探し出す。」

「こんな雨ん中海水浴かよ。」

「・・・行きます。」

プロレマイオスから飛び立った3機は分散してアレルヤのアリオスを搜索する。

バナージは指示に従いユニコーンを島の方角へ飛ばす。

だが島は雑木林に覆われており巨大なモビルスーツでも姿勢を低くしたら簡単に隠れてしまう。

視界の悪い雨の中で探していたのではとても時間内に見つける事は出来ないだろう。

「感じるんだ、そうすれば・・・！」

バナージは諦めてはいなかった。

この広範囲の搜索ポイントでアレルヤの存在を感じ取ろうとしていた。

絶望的な状況であろうと希望を捨ててはいけけない。

それがバナージが戦いで学んだ事だ。

アレルヤの感応派を感じ取ろうと意識を研ぎ澄まさせる。

自身の体の脈動が脳に響く。

すると上空から島の全体を見下ろしある一点に目を集中させた。

「もう一人だれか居るのか?・・・行こう。」

バーニアの出力を下げるとユニコーンを島の陸地に降下させる。

島に近づくにつれて視界には木しか見えなくなっていく。

でもソレに連れてアレルヤともう一人の存在を確かに感じ取る事が出来た。

この息使いは女の人・・・?

ユニコーンを着地させると地面に何かを引きづった様な跡が続いて

いた。

大きさからしてモビルスーツしか考えられない。

その跡の先にメインカメラを向ける。

「アレは・・・!?!」

そこには破損したアリオスと少し離れた場所にアヘッドが横たわっていた。

バナージはユニコーンを急いでアリオスの傍まで歩かせる。

「アレルヤさん、無事ですか!? アレルヤさん!」

「・・・その声は?」

「聞こえますか? バナージです。助けに来ました。」

「よかった、もうアリオスは動かないんだ。悪いけどトレミーまで運んでくれないか?」

「分かりました、すぐにプトレマイオスに連絡します。」

それを聞きすぐにプトレマイオスのスメラギに通信をつなげようとする。

回線を合わせようとセンターコンソールを操作していると・・・

「逃げろ、バナージ!!!!」

「!?!」

突然倒れていたアヘッドが起き上がり右手にビームサーベルを握りユニコーンに襲い掛かってきた。

振りかぶるビームサーベルをギリギリの所で相手の腕を掴み防ぐ。

左からも何か来るのかと警戒したが腕はぶらんと垂れ下がっており動かないようだ。

おそらくは電気系の故障で操作しても反応しないのだろう。

だがこのまま邪魔されたのではアリオスを運び出せない。

そうなれば倒すしかなくなる。

だがアノ機体のパイロットは殺してはいけない。

「どうすればいいんだ・・・どうする。」

必死にどうするべきか考えるが答えは見つからない。

最後まで諦めるんじゃない、それでもと言い続ける。

懐かしい声がした。

しかしそれは聞こえたのではなく心の中に伝わるような感覚。

「マリィダさん……」

今のお前とユニコーンなら出来るはずだ。

マリィダの声に覚悟を決める。

ユニコーンのシステムを目覚めさせる。

パイロットの感応派を感じ取りNT-Dが発動する。

センターコンソールにNT-Dと文字が浮かび上がりバナージの座っているシートが稼動する。

装甲がスライドしていきサイコフレームの赤い輝きが照らす。

頭部の角が左右に割れガンダムに変身する。

「ガンダム……」

その姿を見たアレルヤはサイコフレームの輝きに見せられていた。ユニコーンがガンダムに変身するとオーバーロードで制御出来なくなっていたGNドライヴが稼動し始めた。

微弱ながらもGN粒子が発生しユニコーンに引き寄せられていく。

「何なんだコレは？ガンダム……！？」

目の前の白亜の機体がガンダムに変身しピーリスはすぐには思考が追いつかない。

そしてユニコーンのNT-Dシステムが超兵であるピーリスの脳量子派を乱れさせる。

「あっ頭が……割れそうだ！」

いきなり頭痛がし苦痛に顔を歪ませる。

操縦桿を手放し両手で頭を抱える。

「何かが私の中に入り込んでくる！？あああああああああつ
！！！！！」

大声を上げ苦しみだすピーリス、そして彼女の意識はGN粒子とサイコフレイムに導かれてアレルヤとバナージの深層意識と絡み合う。

第二十一話 革新へ迫る（後書き）

コメント、アドバイスお待ちしております。

第二十二話 意識共有（前書き）

またマリィダさんの出番が少ないです。すみません
またしばらくは登場しません。

第二十二話 意識共有

GNドライブから放出する粒子がユニコーンとアヘッドへ流れていく。

アリオスのGNドライブはすでに制御出来る状態ではない。

にもかかわらずサイコフレームの輝きに導かれ尚も粒子を放出する。GN粒子が3人の意識を共有させ同じ物を見る。

イオリア・シュヘンベルグの提唱した人類の対話、ニュータイプに覚醒したバナージは何を思っているのか。

「何だ、コレは・・・？幻覚を見ているのか？」

意識の共有した世界でピーリスは目覚める。

もう頭の痛みは無くなっていた。

不思議な感覚に包まれながら自分以外に4人居る事に気がついた。一人は・・・

「キサマはソレスタルビーイング！」

ガンダムマイスターのアレルヤもそこに居た。

「キミがソーマ・ピーリスなんだね。」

「何を言っている！」

「そう、彼女は私の中のもう一人の自分。」

背後から声がした、女の声だ。

でもそれはありえない。

何故ならば、自分と同じ声だから。

「私・・・？」

ピーリスが振り返るとそこには自分が立っていた。

姿かたちはまったく同じ、まるで鏡を見ているよう。

「アナタは研究所が私に植え付けた偽りの人格、超兵として私を軍に送り込むために造られたもう一人の私なの。」

「もう一人の私だと？何を言っている！」

「アナタには私の事は分からなくても仕方ないわ。私の人格と記憶は奥底に封印されてしまったから。でも今なら分かるはず、この意識を共有した空間なら私の事が分かるはずよ。」

するとマリーの記憶がピースに流れてくる。

遺伝子工学により試験管から生み出されたマリー、幼い頃から超兵としての訓練、強化を受けさせられていた。

それゆえ自我はなく毎日研究員の言われるがままに生きていただけだった。

そんな彼女にも一つの光りがあった。

一緒に超兵として訓練を受けていたアレルヤだ。

だが同じ研究所に居ても訓練時以外は麻酔で眠らされており話す事すら出来なかった。

それでも脳量子派でアレルヤは話しかけてきてくれた。

それだけが私の生きる希望だった。

「惑わすな！私は・・・私は超兵だ！」

「でも違う生き方だって出来る筈だ！」

そうだ、超兵だの強化人間だのそんなの関係ない。

そんなのに惑わされて自分の生き方を狭めては悲しいだけだ。

バナージは叫ぶ。

「だから感じて分かり合えます。俺達にはそれが出来る筈です！」

「子供が！お前に何が分かる。それに、戦う事しか出来ない私に人並みの幸せなんて・・・」

「お前にはもう、心を許した人が居るだろう。」

また声が聞こえた、今度は女の声でした。

物静かで落ち着いた、そして私と同じ目をしている。

長髪の女はバナージに被さる様にして立っていた。

「もうすぐ会える。そうしたらもう一度自分と言う者を考えて見るんだな。」

「誰の事だ？」

「自分の心にウソは付けない。分かっているはずだ。」

どこで声が聞こえたかなんて分からない。

でも今は不思議と確信に近い感覚でその場所へ向かった。

島へ機体を降下させて行き声を辿る。

「コレは・・・!？」

木々をすり抜けて着いた場所にはピーリスのアヘッドが白亜の機体、ユニコーンガンダムと組み合っていた。

傍にはソレスタルビーイングのガンダムが倒れていた。

「どうなっている・・・!？中尉、聞こえるか？中尉！」

アリオスから発生するGN粒子が3機を覆っていた。

だがこんな現象は始めてだ。

技術部からもこんな事例があると報告は届いていない。

急いで通信でアヘッドに呼びかけるがピーリスの応答は無い。

とにかく行かなくては・・・!

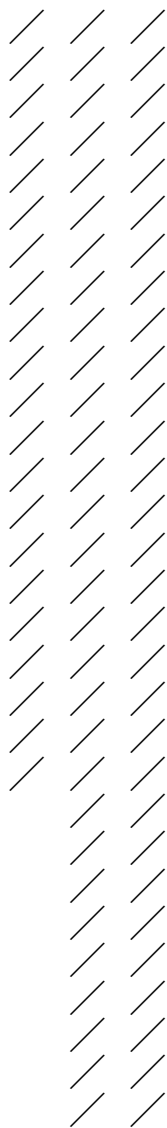
操縦桿を動かしジンクスの膝を付かせコクピットから降りるスミルノフ。

空から降る雨が白いパイロットスーツを濡らすが一切気にしなかった。

ぬかるむ地面を走りピーリスの元へ向かう。

一歩走るたびに雨の水が弾き飛ぶ。

そしてスミルノフもピーリスと同じ意識共有領域に足を踏み入れた。



「どうなっている？・・・私は確か・・・」

突然の出来事に思考がうまく回らない。

ピーリスを救助しようとアヘッドに向かっていたはずが気が付くと意識だけがここに居た。

体験したことのない現象に戸惑うスミルノフ。

そんな彼を2人は待っていた。

「大佐、来てくれたんですね。私の為に・・・」

聞き覚えのある声がした。

振り向く先に彼女は居た。

「中尉！？無事か？」

「アナタには話さなければいけません。私と彼女の定めを。」

また声が響いた、だがそれはおかしい。

彼女は私の目の前に居るが言葉を発してはいない。

「私の名前はマリー・パーファシー、彼女の心の奥底に眠るもう一人の彼女。」

「中尉が2人！？」

「今までアナタがピリスとして接していたのは超兵として運用する為に造られた偽りの人格。でも彼女は確かに存在するわ。」

「・・・どう言う事だ。」

「私はアレルヤと一緒に居たい。でもそれはアナタと彼女を離れればなれにさせてしまう。」

マリーの隣にアレルヤの姿が浮かび上がる。

そのパイロットスーツを見て傍に倒れていたガンダムのパイロットだと分かった。

「そうか・・・キミがガンダムのパイロットか、ソレスタルビーイング！」

「スミルノフ大佐、マリーは優しい子です。連邦に戻ればまた彼女はまた超兵として扱われてしまう。」

「だがキミはソレスタルビーイングだ。キミと一緒に居ても中尉は戦いに巻き込まれる。」

「そんな事はしません！」

「テロリストの言う事を信じるほど私は愚かではない！」

2人の会話は平行線のまま進展しない。

その様子を見ていたバナージは思う。

「想いは同じなのに・・・」

彼女を守りたい、でも立場の違いからそれを相手に譲る事なんて出来ない。

意識の共有で想いは伝わるはずなのに、それを自分の心が認めない。こうして話し合えても分かり合えないのだろうか・・・？

「お前が諦めてどうする。」

「マリィダさん・・・」

「最後まで諦めるな、それでも言い続けろ。」

「・・・分かりました。ユニコーンならそれが出来る。」

「そうだ、バナージ。お前は私達の希望、いつも見守っているぞ。」
そう言ってマリィダの思念は消えていった。

ユニコーンのサイコフレームが4人の意識を乗せると共鳴し始める。
赤く光っていたフレームが緑色の輝きに变化する。

「大佐、私はアナタの義娘になりたかった。」

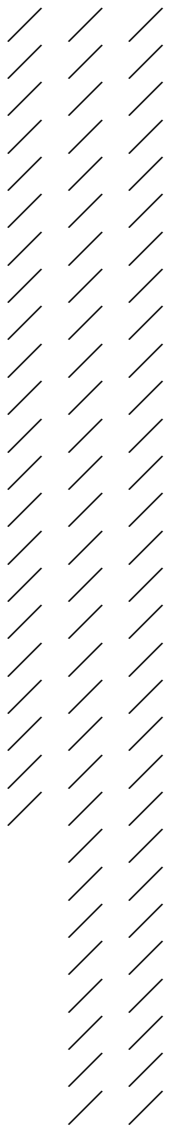
「中尉・・・」

「戦いしか知らない私に心を与えてくれた。それは幸せな事なんでしょう。でも超兵である私に人並みの幸せなんてあっては成りません。ですが大佐と一緒に居させていただいて私は欲しくなっていました。幸せと言う物を・・・」

「だったら・・・！」

「私には大佐が居てくれた。ですがマリィには何もない。だからこれからは彼女と一緒に探していきます。幸せを・・・」

「・・・分かった。その言葉だけで十分だ。」



雨の降る中スミルノフは立ち止まる。

ユニコーンのサイコフレームから輝きは無くなり装甲がスライドしていく。

それと同時にアリオスのGNドライヴの活動も停止する。

組み合ったままのユニコーンとアヘッド、白亜の機体はアヘッドの腕を掴みゆつくりと地べたに機体を横に寝かせる。

そうすると損傷しているガンダムへと歩いていった。

寝かされたアヘッドはしばらくするとコクピットのハッチが開いた。そこからアロウズの深緑のパイロットスーツを着た彼女が出てきた。スミルノフは一目見て分かった。

ピーリスと違う。

見た目は同じだが今までの彼女ではない事が分かる。

「キミはマリー・パーファシーか？」

「そうです、スミルノフ大佐。」

「・・・そうか、本当に中尉ではないのだな。」

「大佐・・・」

「ガンダムのパイロットに礼を言っておいてくれ。5年前低軌道ステーションでの事故、救助活動に参加してくれた事は感謝する。」

スミルノフはマリーに背を向けてジンクスへ向かい歩き出した。

哀愁の漂う背中に彼女は走った。

「大佐・・・！！！」

抱きつく彼女をスミルノフは優しく受け止めた。

「生きてくれ、行き続けてくれ。彼と幸せにな・・・」

もう心に迷いなどない。

2人は体を離すと互いに敬礼をした。

「今までありがとうございました。大佐！」

「・・・」

右腕を下ろすと再びスミルノフは歩き出した。

ジンクスのハッチから伸びているワイヤーに足を掛けると上昇させそのままコクピットに乗り込んだ。

GNドライヴから赤い粒子を発生させジンクスは空へと飛んでいく。

マリーは見えなくなるまでスミルノフに敬礼をしていた。

その目からは涙が流れていた。

ユニコーンがアリオスのハッチを無理やり開放しアレルヤは外へと出た。

その足で敬礼そするマリーの元へ行き背中から彼女を抱きしめた。

「ありがとう、生きていてくれて・・・ありがとう、こんな僕に生きがいをくれて・・・」

「アレルヤ・・・」

2人は互いの温もりを感じあった。

雨は止み雲の隙間から太陽が見え始めていた。

第二十二話 意識共有（後書き）

感想、アドバイスお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2096v/>

機動戦士ガンダム00 The human race's reformation

2011年10月26日14時57分発行